既刊六冊の內第二、三、五、六の四冊を得た、第二は殆ど全部植物の記事、第三は古城址と植物・第五は史蹟と植物で史蹟中には熱田裁斷橋の精細なる考察と知多郡野間における源義朝の終焉地たる大御堂の記事がある、第六も史蹟と植物で東海第一の大墳たる熱田の斷夫山古墳調査を載す。

## 愛知の史蹟名勝　洋裝　一冊　四六判本

柴田常惠、矢吹活禪共撰

昭和二年　東京　三明社發行

尾參二國の史蹟名勝を交通系統によりて區別しこれを案內記流に說明したもので大小の寫眞を挿入す。

## 知多小誌　稿本　一冊　中本

著者不明　明治二十年稿

明治二十年明治大帝が京都から還幸の途知多郡武豊港に行幸された、當年武豊は海軍々港となつて武豊線の鐵道は東海道線よりも早く布設されて居た、本書は大帝行幸につき知多郡の名勝舊蹟古今の詩歌等を叡覽に供せんとて縣廳か郡役所かにて作つた稿本のやうである。



## 西春日井郡志　洋裝　一冊　菊判本

大正十二年　西春日井郡役所編並發行

名古屋市の西批杷島町に郡役所のあつた郡で舊蹟としては淸洲城址があり、これに關する記事は可なり詳述されて居る。

## 愛知縣丹羽郡誌　洋裝　假綴　一冊　菊判本

大正六年　丹羽郡敎育會編並發行

愛知縣の西北にあつて、犬山城を要部としその東南平野の一帶地方である、天正年間幾多の英傑を輩出し今もその宅址が殘つて居る、史蹟と形勝に富んで居る地方誌である。

## 愛知縣海東郡案內記　洋裝　假綴　一冊　四六判本

明治四十三年　海東郡協賛會（關西府縣共進會）編並發行

津島町を中心として神社に津島神社寺院に甚目寺を有する農業全盛の郡案內記である。

## 西行堂集　一冊　中本

內藤東甫編　天明元年序

明治三十六年　名古屋豊田棄三郎刊

本書「西行堂中興志」ともいふ、名古屋の北部玉林寺内にこの堂あり、編者西行の假寓したりと傳へられる附近の寺址より出土した木像を安置して堂を建てこれが記念として東西兩京其他の騷客より詩歌文詞を得てこれを編纂したのである。（名古屋村野時哉君惠贈）



## 三河國の部

### 三河刪補松　寫本一冊　中本

林　正森撰　安永四年原序

本書は「三河二葉松」を基としてこれに刪補を施したのである「二葉松」は殆んど文詞なく郡村、石高、地名、社寺、人物、故城壘を列記した表の如きであるが、本書は項目の下に注解の文あつて讀物と稱し得る、その内に特產の三河木綿を載せ、これが來由を記して延曆十八年其原種を蠻人三河に積み來りこれを積みたるに始まる、そは木棉にて今の草棉にあらずとして居る、卽ちこの棉種は現在の支那やアメリカの綿苗と異りて印度種の棉であることが記してある。

著者は三河吉田の人林自見齋通稱彌五右衛門といふ、家藏本は「三河志」の著者渡邊政香の手寫である、政香の「三河志」は天保七年に完稿して居るから現本は化政頃の寫と思はれる。

### 三河國官社私考略　一冊　中本

羽田野敬雄撰

天保十三年序　三河吉田　鐵物舍　名古屋　皓月堂發賣

延喜式神名帳に載する式社とこの國に古く傳へらるゝ「國內神社名帳」といふにある諸神社の所在を究めた書である、本書の奥付によればこの書は著者が出版すべく豫期した「參河國古蹟考」十卷の內の前驅をなすとの如くである。

「三河古蹟考」は十卷より成り一、二卷官社私考三卷總國風土記考、和名鈔所載郡鄉考、四、五、六卷歷代事蹟考、七、八卷古歌名蹟考、九卷舊寺舊墓考、十卷雜考より成るので、現に寫本として傳へらるると見え內務省地誌目錄には「三河舊蹟考」五冊として擧げてある。

## 參海雜志　一冊　中本

渡邊華山撰　天保四年記

大正九年　東京　米山堂發行

稀書複製會の稿本複刊である、同書解說によれば天保四年四月十四日華山が田原城下を發し三河沿岸の漁村を巡遊して堀切村から伊良虞日出に接する縱線一里に亘る沙濱地帶を踏査しつゝ伊勢の神島に渡つた時の自筆繪入日記の草稿本である。この行華山の目的は田原藩の系譜と三河誌取調の公用を兼ねた旅



行であつたといふ、大部分は寫生書帳である。

## 岡崎市史　洋裝九冊の內七卷　菊判本

柴田顯正編

大正十五年－昭和四年　岡崎市立圖書館發行

本書は岡崎圖書館長柴田顯正氏の編纂する所で岡崎市の事業として圖書館から逐次發行されて居る、全部九卷の內第七卷まで印刷を終つた、第一卷は總說、領主篇で主として德川氏の居城時代を敍し、第二卷城主（德川幕府時代）第三卷市街の沿革、第四卷交通（東海道の驛傳驛路制度）第五、六卷領土篇として三河諸侯の郡村誌、第七卷社寺篇に及んで居る、多くの圖版彩畫等資料饒多で德川氏の歷史と三河の地理、政治制度を知ることが出來る。

## 碧海郡誌　洋裝一冊　菊判本

大正五年　碧海郡敎育會編並發行

この郡は三河の西部で知立、刈谷、安城などの町々を含む地方である、本書郡勢を敍する外に古來の沿革名勝舊蹟、人物、風俗等を擧ぐ、大正天皇卽位式の大嘗祭に悠紀新田の選に當つた記念として出板さ

れた。

## 愛知縣幡豆郡誌

洋装一冊　菊判本

大正十二年　幡豆郡役所編並發行

西尾町を中心とする南三河の郡誌であるが、郡勢の記錄に重きをおくために地誌的價値足らざるを遺憾とす。（三河西尾町岩瀬文庫惠贈）

## 三河國額田郡誌

洋装一冊　菊判本

額田郡教育會編

大正十三年　額田郡役所發行

三河の中央にありて岡崎市を包む郡で德川氏譜代の從士が多くこの地方から出て居る、また歷史的古刹に富んで居る。

## 南設樂郡誌

大正十五年　南設樂郡敎育會編並發行



新城町を中心として山寺に鳳來寺、古戰場に長篠のある豊川鐵道沿線の郡である、戰國時代武田、德川兩氏の接衝地として有名であつた、卷尾に附錄として長篠戰記を付す。

## 大給之松平

謄寫板本一冊　中本

川住鋥三郎撰　大正二年

昔の吉良氏の領地を含む西尾藩における大給松平の歷史であるが、根據を藩内各村の地理と古跡に卽して調査を進めてあるから南部三河の地誌として多くの資料が含まれてある。

# 遠江國の部

## 遠江古蹟圖會　寫本四冊　大本

長　庚撰、横地書　享和三年自序

著者はその自序に掛川處士長庚と記し、また他の序文に再影館主人とし未だ誰人といふことを知らぬ、僕が靜岡の葵文庫で見た或る書中に本書を引用し近藤氏の遠江古蹟圖會云々の文字あるを記臆して居る

本書はこの凡例に前篇三卷とし五年間に百項を得たるを以てこれを淨書する旨を記してあるが、目錄には卷別なく四冊本となつて居る、挿畫には横地氏弄の落欵がある、本書の内容は水、塚、石碑、石、山、古城の跡、神社、寺、木等に分けてその傳說、奇聞、現狀を記し遠州一國に及ぶも濱名湖周圍のことが特に精しいやうである、叙事は橘南谿の東西遊記を彷彿せしむるところがある。

現本は愛知縣西尾町岩瀨文庫主の故岩瀨彌助君の好意によりその文庫所藏の稿本を以て謄寫したものでその際主人自ら筆者書家を得るため親しく御世話されたのであつたが、岩瀨君は昭和五年一月末物故されたのは惜むべきである、同君は一介の肥料商から鉅萬の富をなし天下の珍籍奇書を多數に藏し西尾町のために宏大なる圖書館兼公會堂を立てられた篤志家であつた、しかもその圖書館公會堂を建設された



發意についても面白い感ずべき逸話があるけれどもこれを語るには本書の解題から餘りに脫線するから略し玆に本書を登錄する機會に唯だ故人の好意に敬意を表するに止むる。

## 萬葉集遠江歌考　一冊　大本

賀茂眞淵撰

文政三年　濱松　夏目甕麿板

寛保二年の頃著者が萬葉集に載する遠江の歌、譬喩歌、相聞歌、旋頭歌十九首につきその意義を解說し又地名を立證した遺稿があつたのを門人たる夏目甕麿が出板したのである。

## 掛川誌稿　洋裝假綴十五卷七冊　四六判本

齋田茂先撰　文化年間稿

昭和三―四年　靜岡　鄉土研究會發行

本書は文化年間掛川藩主太田資順侯が儒臣齋田茂先山本忠英に命じてその封内の地誌史實を調査編纂せしめたもので名は「掛川志稿」であるが實は遠駿豆三州に跨がる靜岡地誌である。

本書の梗概は卷首に「この編は掛川封内の小志といへども佐野郡に始り山名、周智、豊田、城東、榛原の諸郡に屬し駿州豆州の域に及べば其傍通する所少からず、故に東海道以下封内に係るものは數條を擧げて卷首となし、その本編十二卷中載するところの山川、土產、神祠、佛刹、墳墓、古蹟の類一々各村の下に列叙し更に各郡の門目を立てず村里を逐ひ事物に隨て其名を朱書し他村と相混せざらしむ、佐野郡九十四村は本より本城に係れる所なれば聊か遺漏せず……此餘諸郡及び他州に斗入する我封内は數村にも過されば其例にあらさるなり云々」とあるによつて推測が出來る。本書東海文庫として四冊を發行し尙殘部本編二冊索引一冊とは續刊の筈である。

## 郷里雜記

寫本　五卷　二冊　　中　本

八木美穗撰　　年號不記

本書は今の小笠郡横須賀領に屬する領地の地誌である、著者は國學者で且考古學者であつたと見えて此領地遠州灘に面する海岸地帶の變革や古名由來につき造詣深きやうである、家藏本は靜岡縣立葵文庫の好意によりその藏本を以て謄寫したのであるが、卷末に左のが奥書ある。

此五卷は横砂の御城主なる西尾隱岐守の仰ごとを蒙りて其殿につかへまつる濱野の村の八木太郎左衛門美穗ぬしの書れたるなりけり、さるを翁なくなられて後原稿ひとゝほりのみぞ殘りけるをその敷ゆる見付の總社大久保縫殿助忠尙神主よりかり得てうつしつ云々（文久元年三月）

原著年號を記さゞるも德川末期に屬するものと思はる、內務省地誌目錄に「横須賀郷里雜記」とあるものと同一本であらうか、それには著者名年共に記載がない。

## 靜岡縣榛原郡誌

洋裝活字本上下二冊　　菊　判　本

大正五年　　榛原郡役所編並發行

上卷は沿革部として沿革人物古文書を擧げ、その間に古蹟古城を綴入し、下卷は地理部として地理、社寺郡勢狀態を叙述してある。

## 靜岡縣小笠郡誌

洋　裝　一　冊　　菊　判　本

大正四年　　小笠郡役所編並發行

この郡は遠江の東南部にあり掛川堀内の二鐵道驛を有し舊城下町として掛川横須賀の二邑がある、小夜の中山夜泣石は古來有名な傳說をもつて居る、今日は茶業の發達したる郡として聞えて居る、本書各町村誌と名所舊跡、人物、風俗等を記す。

## 遠州史蹟　洋裝 假綴 二冊　菊 判 本

西村芳良編

大正十三年　濱松　遠州史蹟社發行

雑誌の躰裁にて編を重ぬる計畫にて第二號まで出て居る、續刊されたるや不明、この二冊には城址、舊蹟、故人傳等を載す。



# 駿河國の部

## 駿府巡見記　稿本上中下三冊　大 本

著者不明　元祿十六年稿

本書内題には駿府巡見帳とある、表紙にも同名に墨書してあつたのを後に題箋を貼して巡見記としたらしき痕がある「駿府巡見記」といふ名は別本にもあるから寧ろ巡見帳の方が紛らしくない、この冊子下卷末尾の奥書に

右者元祿十六癸未仲秋三日蒙　官命爲駿府御目付同廿二日發武陽廿四日赴于彼地自翌廿五日至臘月六日在勤百日之内所巡見寺社無大無小莫詳莫疎、所及目觸耳之事皆記載而爲一卷、然住侶社職蒙昧之應語村老邑民愚魯之談話交記矣、故聊年月之差、焉焉之誤亦有之乎云々

駿河國志によれば元祿十六年の駿府御目付は三島清左衞門といふ人になつて居る、しかし本書の著者は百日の在勤とあれば臨時巡檢目付であるらしくもあるので其の人を明かにしない。

本書の内容は先づ其日の行動を記し村邑の支配方を明にして邑内の社寺につき由緒、結構、社職住侶の

歴代、寶物等を列擧してある、筆跡時代の調を現はし大切に保存されたるやうであるから多分著者の淨書本であらう毎冊待賈堂の捺印がある。

## 駿河志料　　和裝活字本五册　　大本

一　中村高平撰　　文久元年序

昭和五年　　靜岡市　　靜岡鄕土研究會發行

本書は靜岡淺間神社新宮神主であつた著者が十年の歳月を費して國內實見の末になつた書で百八卷の大冊である、駿河の地誌としては比較的後年の著作であるだけに先出諸書を參考する便があり又廣く實査を行つたから諸方面に亘り頗る精細である、斯る貴重資料でありながら著者の家は夙く流轉したのでこの志料も他に轉々散佚して何所にも纒つたものがない、それを靜岡鄕土研究會の橋本博君が諸方の藏書を採訪して全冊を集め總計十篇の內五篇を發行するに至つた、以下引續き刊行中である、第一篇には總載と志太、益頭の二郡第二編有度郡と安倍郡一部、第三編安倍郡、府內、盧原郡、第四編（未刊）第五編駿東郡及古文書、第六編古文書を載す、各郡誌は村別に記述し一村每に田額、神社、佛寺、名勝、山川、古墟、道路、人物、舊家、古戰塲を記す。



## 名平離會の記　　洋裝假綴七卷三册　　四六判本

加藤翺負撰　　天保十一年記

昭和三年　　靜岡市　　靜岡鄕土研究會發行

本書は近年靜岡の足立鍬太郎氏によつて發見されたもので東海文庫三册本として刊行された、著者は天保年間駿府町奉行となつた人でその在任中の著である「名平雜會」は「なをりぞ」で「名を折るな」である。

內容は府城として家康の幼時と晚年のことを記し、それより城下の社寺、町內に及び更に各郡の部において有度郡を初めとして久能山東照宮を最も精述し以下諸郡の社寺を記してある。

## 駿河名勝圖會追加　　寫本一册　　大本

中島島岳書　　安政四年稿

地誌目錄本篇に載せた「駿河名勝圖會」の追補である、家藏本を傳寫された東京加賀豊三郎君はその後靜岡笹野堅氏の藏本「駿國見聞誌」と對照してその同一本なることを知り併せて家藏本に二三景書の脫漏あり且卷末に魚譜の添ふてなきを見出されてこれを追加された、よつて僕もまた加賀君の新寫によつ

てこれを追加し一冊をなしたのである。

地誌目錄本篇には本書の記事の筆者と著作年代の詳がならぬまゝを記したが「駿河見聞誌」には左の奥書がある。

安政四丁巳歳秋七月駿府在番中寫之　中島安定藏

これを以て見れば記事も書も中島島岳で安政四年のものであることが知れる、但だ原書がその以前にあつたが否かは確められない。

## 淸見寺紀行　一冊　中本

山田貞實撰（極娯亭主人）　天保年間自巳出板

文政六年の頃駿府勤番の上司なる著者が府中を發して興津淸見寺に遊んだ紀行であるが途中經過する舊蹟の歷史を語合ひつゝ景を賞し歌を咏して居る、又本文の間に多數の景書を挿入してある、天保年間に至り著者の男義綱なる人が親の老後を樂ましめんため上梓して知人に配布したのである。

## 俳諧裾野集　上下二卷　東海文庫第四輯收錄

瓦松萕肆山編　嘉永元年記

駿河名所の書を卷頭に置き以下各郡の名勝事蹟、產物につき詠じた俳諧集である。

## 豆駿遠風土略誌　一冊　小本

山田永二郎撰

明治十年　濱松　山下仁平出板

鄉土小學讀本の類ではなく、可なり体をなした靜岡縣地誌である。

## 靜岡市史編纂資料　洋裝　假綴　六冊　菊判本

昭和二—四年　靜岡市編並發行

本書は靜岡市史編纂主任から同縣史編纂主任になつて居る足立鍬太郞氏の編集するところで此六冊に市史の骨子は悉く點出され且資料にそれ〳〵說明が加へられて居るだけ頗る興味がある、其第一卷は上古から戰國時代を記し卷末に「今川時代の國文學につきて」の一篇がある、主として柴屋軒宗長の紀傳と其作品解剖をなす、第二卷德川家康時代を記し附錄として「國志と國志學者」「宗良親王御年譜」等を擧げ駿河諸地誌の概要が知れる、第三卷德川時代、第四卷明治維新當時の靜岡、第五卷火災と消防制度

第六卷産業史等を記述す。

## 静岡市史 第三編

洋裝四冊の內一冊　菊判本

昭和五年　静岡市役所編並發行

別項蒐集の資料により静岡市ではいよ〳〵市史の編纂を完成し全卷四冊の內その一冊即ち第三卷を發行した、本卷は市政篇の上冊で明治初期から市政沿革市政概要を記す。

## 大宮町高辻之帳

寫本一冊　大本

大宮町舊記　寬永十年寫

大宮町に存する舊記を字体印影までそのまゝ臨摹したもので寬永十年三月の高辻帳即ち水帳である、地租石高を載せ里正町年寄等の名が列記してある。

## 大宮年表

稿本一冊　大本

大宮町舊記　正德五年稿

富士山とその麓の大宮町に鎭坐する淺間社の年表にて內題には「當山當社之傳記」とありて古史に見るところの富士山に關する記事及び大宮町の本社勸請より正德五年の記に及んで居る、別項寫本「當山當記の傳記」には大宮町の里正を勤むる佐野氏の奥書がある、曰く、嘉永三戌年予原本得而本家ら殘し置今本家に秘藏也云々、この原本なるもの本書である。



## 當山當社の傳記

寫本一冊　大本

大宮町舊記　嘉永七年傳寫

別項大宮年表の寫にて中に所々注記を加へてある。

## 士峰錄

六卷二冊　大本

菅原玄同編　寬永元年自序　延寶六年跋

延寶年間　京都　吉野屋宗兵衛板

萬葉古今を初め富士に關する長短歌、諸物語の文詞、史典、詩賦、其他富士に關する文献を編輯したもので第一卷倭歌部、第二卷倭詞部、第三卷本朝僧氏詩文、第四卷浮屠氏詩文部、第五卷野史稗說の語、第六卷異朝詩文として支那朝鮮の文華をも收錄してある、本書に刊行年月なきも第一卷の末に書肆名が載つて居る、板行文字其他から推して著者の子由益洞雲の跋文延寶六年記と略ば同時の出板と思はる。

著者は播州飾磨郡蒲生村生にて京都に出て藤原惺窩五高弟の一人になる、寛永五年四十八才にて沒す。

## 富士百詠　一冊　大本

加藤子明撰　延寶五年　江戸　仲野佐太郎刊

百詠の詠歌の前後に林祭酒その他當時の學者の序跋數多を載す、子明名は倫、江戸の隱士。

## 富嶽圖會　寫本一冊　大本

書者年代不明

富士登山の實景を何人か素人が彩色にて書いたもので拙劣のうちに眞相が現はれて居る。

## 富士紀行 高峯の雪　和裝活字本一冊　中本

村岡良弼撰

明治二十二年　東京　青山堂發行



甲州吉田口より登つて須走を下り御殿場、竹の下、關本、小田原と昔の足柄街道を國府津に出る紀行である、通過するところ地誌を語り歴史を說く學者の紀行文である。

## 富士の地理と地質　洋裝一冊　菊判本

石原初太郎撰

昭和三年　東京　古今書院發行

大宮の富士淺間神社にて編纂する「富士研究」の第五卷である、地圖寫眞を挿入し富士の山容、地質、氣温、登山經路、山麓村落等を趣味を加へつゝ科學的に研究した著述である。

## 富士の文學
## 富士の美術　洋裝一冊　菊判本
## 富士の遺蹟

高柳光壽　澤田章　柴田常惠著

昭和四年　東京　古今書院發行

官幣大社淺間神社々務所で編纂する「富士の研究」第四冊として發行されたもので表題の三記を收録す。

## 富士山の地質と水理　　洋　裝　一　冊　　菊　判　本

神原信一郎撰

昭和四年　東京　博進社發行

工學博士中山秀三郎氏の序文に著者は富士山麓より流出する桂川筋の水力發電工事に從事しその水理調査に端を發して富士山本体の研究に及び地質調査、熔岩泥流、地下の成層等を確め一方には史料考證をも集め終に本書をなしたとある、本書中「富士八湖及富士五川の地質と水理」の項に努力が注がれてある。（東京著者惠贈）

## 五　湖　遊　記　　和裝活字本一冊　　小　本

一火會同人記　昭和二年記

大阪鐵商の紳士連が富士五湖巡りをして大宮に出た紀行文とその寫眞で面白おかしいもの。（大阪津田勝五郎君惠贈）

## 靜岡縣名勝誌　　洋裝 假綴 一冊　　菊　判　本

三浦直正著



明治三十九年　靜岡　小池商店發行

## 駿　東　郡　誌　　洋裝 假綴 一冊　　菊　判　本

明治三十一年　靜岡　文林堂發行

小學兒童のためにする鄕土讀本である。

## 靜岡縣安倍郡 清水町沿革誌　　洋　裝　一　冊　・　菊　判　本

大正六年　清水町役場編並發行

明治二十七年時の町長の編みたる沿革誌があるを以て本書を第二編といふことになつて居るが編纂は全く別のものに出來上つて居る、現時清水町は江尻と合併して市制を施いて居る、我邦において最も發達の早い市邑の一である、本書は即ちその沿革を叙したもの。

## 甲斐國の部

### 甲斐舊事錄　　寫本一冊　　大本

著者不明　　明和元年稿

甲斐國開闢の傳説から甲斐源氏の事、武田氏の興亡、勝頼最後の地田野における景德院建立の由來、織田時代より德川時代における領主並に代官の治績、甲府大火、定額山善光寺由來等を記し、明和改元と書いて筆を止めて居るからその頃の記錄であらふ、著者は不明。

### 甲陽記錄　　寫本一冊　　大本

著者年代不明

甲州が海（湖水か）から陸となりしといふ傳説を述べ武田氏より德川時代における領主城番吏員とその治績を擧げ終りに社寺靈場のことを記す、文化六、七年ころの著らしく思はる。

### 兜巖史略　　寫本　乾坤　二冊　　大本



著者年代不明

上卷に甲州諸家の興廢記拔萃を載せ、下卷にこの系譜を出す。

### 東八代郡誌　　洋裝一冊　　菊判本

大正三年　　山梨縣教育會東八代支部編並發行

甲州の中心に當る盆地にて石和町あり、また一宮村には淺間神社といふ由緒ある神社がある、本書には郡内の社寺古塚等を細記す。

### 山梨縣甲斐國 西八代郡誌　　洋裝 假綴 一冊　　菊判本

明治四十五年　　西八代郡役所編並發行

### 北巨摩郡誌　　洋裝一冊　　菊判本

大正四年　　山梨縣教育會北巨摩支部編並發行

甲府市の北西にある韮崎町を中心とする地方の郡誌で村町誌を主として概略を記す。

### 東山梨郡誌　　洋裝一冊　　菊判本

大正五年　山梨縣教育會東山梨支會編並發行

甲府盆地の最も東部にある勝沼町がその舊郡役所所在地である、本書郡勢を記するを主とするも各町村誌中に多くの歴史的地理の所載を含む。

## 御嶽昇仙峽と其奥　洋裝　假綴　一册　菊　判　本

石原初太郎著

昭和四年　東京　上田泰文堂發行

甲州の名勝御嶽昇仙峽の記であるがその以外御嶽山を探究説明し、こゝにある社寺、遺品、植物のことに及び甲州御嶽の説明書として最も細を極めたものであらう。

## 大菩薩連嶺　洋　裝　一　册　四六判本

松井幹雄著

昭和四年　東京市外　光大社發行

甲州を郡内と甲府盆地に分つところの大山脈が大菩薩連嶺で更に東に走つて武藏秩父山系と連亘して居る、大菩薩嶺は敢て高山といふほどではないがその山容が高山の相を備へて居る、著者及び「霧の旅」會の同人によつてこの連峰の跋渉記を各方面から書綴られ多くの珍らしい寫眞板と併せ載せられて居る

（東京吉田直吉君惠贈）

# 伊豆國の部

## 新板豆州熱海道知邊　一冊　中本

著者名不記

元祿八年　於豆州熱海梓之

熱海温泉の刊本として最古の書であらう、先づ江戸から温泉に至る土地案内を道ゆきぶりに記し、更に温泉場における名所や湯の効能を宿屋の亭主の口にかりて述べ、一体に德川初期名所記の面影を存して居る、本書流布本少く卷頭に熱海温泉の繪圖を載せ次に萬卷上人が海中の熱湯を陸地に導く圖、湯前權現の書等がある。

## 槃游餘錄第三編　寫本一冊　大本

吉田桃樹撰　寛政四年記

槃游餘錄は全部十卷の旅行記であるが未だ完本を得ない、本書はその第三編で伊豆遊歷の記である。



著者は幕府の能吏で學識あり種々の方面に功を立てた人であるが後讒にあひて剃髮し江戸根岸に隱居した、本書に記するところはその退隱後の旅行で洽く伊豆を廻ぐり名勝を探ぐる外、古文書金石文に注意して採訪したと見え書中幾多の影寫を揭げてあり、又景勝の寫生書もあり記文と相待つて佳良の資料である。

## 伊豆日記　上下全一冊　大本

富秋園海若子撰

文政五年　江戸　松屋善八、外三都名古屋書肆發兌

「圖書解題」にはこの「伊豆日記」を載せず、同名の別本にて賀茂季鷹の序文ある赤井源たゞゆきといふ人の江戸から熱海に行く「伊豆道草」と卷頭に題する書を擧げてある、本書には大石千引、六樹園雅望等の序文あり、紀行の方向もまた異つて居る、卽ち江戸を發して三島に出て北條、修善寺を經て天城山を越えて河津に出で海岸に沿ふて伊東まで行き、又引返して下田に出て居る、この間に源賴政の妻菖蒲の前の故鄕にその墳墓あることを好奇心もて詳しく記してあるが、これは土地の傳說に過ぎぬ、著者はなほ旅行をつゞけて下田から更に西海岸を縫ふて沼津に至るまでを記して居る、その間に千春といふ

人の寫生畫書が所々にあり、又本文には狂歌の數々を付けてある、この著者本名を三河口多仲といひ幕吏で伊豆代官を勤め（別項七島めぐり參照）空海流の書道が自慢であつた、本書は卽ちその自慢の自筆刻本である。

## 雁のね日記　上下二冊　大本

冨秋園海若子撰

天保九年序　松濤舍藏板

「伊豆日記」と同じ著者の作である、序文によれば「伊豆日記」を書いた時の旅行から二十年を經てをる、後年の旅行は相模から伊豆の東海岸を過ぎ修善寺附近に廻はり駿河に入り駿府まで來て居る、例により古事古歌を引きて舊跡を談ずるところが多い。

## 伊豆濃國懷記行　寫本　乾坤　二冊　大本

箕川　某撰　天保九年序

伊豆國田方郡にて丹那、田代、畑諸村を領する幕臣酒井氏の家宰が主人の代替に當り天保六年領地巡檢に出で時の紀行である、往路は箱根を越えて三島から領地に入り、歸路は黒嶽峠を越えて熱海に下り根府川の關所を過ぎて歸へるのである、巡檢中は領民に歡待され名所見物をする、德川時代の太平氣分が窺はれる。

## 南方海島志　寫本三冊　大本

秋山　章撰　寛政三年自序

「增訂豆州志稿」の別冊をなす「伊豆七島志」三卷二冊の初稿本である、今本書を七島志に對比すると隨分異つた躰裁となり別本と思はるゝ位に更改されて居る、原著者が其後に稿を改めたのか將たまた萩原正夫が增訂出板にあつてかく修訂したのか未だ研究するに至らぬ、本書には七島並にその附屬併せて十島の彩色略圖が挿加されてある。

## 七島めぐり　寫本五卷合一冊　中本

小寺應齋撰　寛政八年稿

地誌目錄本篇に載する刊本「七島日記」と同一であるが、表題には「寛政七島廻り」とし且本文に多少の差異がある「七島日記」は文政七年の刊本であるのに本書は寛政十年の書寫なるところを見れば刊行前寫本として行はれたものと見える、現本の奥行に左の數行の文字がある。

御代官三河口太忠伊豆國七島之支配被仰付ニ付三年己前右島爲見分罷越候砌書付之者仕立候書面の由

寛政十年午二月寫

この奥書によつて「七島日記」に名を現はしてない撿分使は三河口太忠であることが知れた、尙又地誌目錄本篇に載せた古川古松軒の「八丈島筆記」が此撿分使三河口太忠の見聞談を筆記したものであることも知れた、それから更に「七島日記」の著者はたゞ應齊とのみで姓不詳であつたが「圖書解題」に小寺應齊の名がある、して見ると本書の奥書にある「書付之者」は卽ち同じ小寺應齊であらねばならぬ。

## 伊豆海島風土記　上中下三卷　東海文庫第十二輯收錄

佐藤行信撰　天明二年記

上卷は八丈島の風土、中卷は自餘の諸島、下卷は諸島の物産動植物等のことを記す、解題者の說によれば「弓張月」の著者瀧澤馬琴は本書より多く材料を得て居ると、又曰く本書は原と六卷本であつたが内三卷を散佚して居ると。

## 八丈島略土記　寫本一冊　中本

著者不明　寶永年間記



本書の跋語に享保六年友人の文庫より得し云々とあり、又書中に寶永の文字を見るから相當古い土地風俗の記錄であらう、尙終りに享保十年書寫の三宅島三倉島の記を付し以上三島の彩色略圖を載てある。

## 八丈裁衣織　寫本二冊　中本

服部義高撰　文化八年自跋

著者は三宅島々長の家から八丈島官船預り役服部家を繼いだ人である、本書の題名は「八丈キリコオリ」といひ島における故老の口碑や地勢傳說を隨筆したもの、浮田秀家の事蹟、島中唯だ二の淨土宗寺院の事、支那人漂流のこと、八丈縞織布のこと其他風俗を記す、別冊一卷には田地徵税のこと、島々樣子大概書を記するもこれは本篇との關係なき一冊のやうに思はれる。

## 無人島談話　寫本三冊　大本

曾槃編　寛政九年自跋

薩摩藩の侍醫が幾多の漂流談を或は自ら遭難民に尋問し或は記錄によつて集錄したのでいづれも伊豆諸島又は小笠原島又は八丈島附近の無人島のことらしい、卷末に漂流者に質して無人島の氣候、動植物、魚介等を調査した項は流石に本草學者の記錄のやうであるが、漂流島嶼のことは語るもの尋ねるもの共に

茫莫たるを免がれぬ。

**伊豆めぐり**　一巻　東海文庫第十二輯收錄

月漣舍巴明撰　天明三年記

伊豆國内の俳諧行である。

**靜岡縣田方郡誌**　和製活字本一冊

大正七年　田方郡役所編並發行

郡は伊豆の北半部で温泉の本場所であるだけ、地文、地理中諸温泉の項詳しく、人文地理中には名勝舊蹟を各町村別に記す。（東京田中荆三君惠贈）

**下田の栞**　洋裝　假綴　一冊　中形　横本

大正三年　下田巳酉倶樂部編並發行

**新撰熱海案内**　洋裝　假綴　一冊　小　本

齋藤和堂撰



大正十四年三版　熱海湯泉組合發行

袖珍の可なり重寶な案内記である、大湯の間歇泉か大地震以後間歇泉でなくなりしことまで新しき事實を記してある。

**伊豆大島火山**　洋裝　假綴　一冊　菊　判　本

明治三十五年　東京地學協會編並發行

大島の火山、一般地誌、石器時代遺跡等を學術的に説明した冊子。（名古屋村野時哉君惠贈）

**八丈島仙郷誌**　洋裝　假綴　一冊　四六　判本

小山二郎撰

大正十三年　八丈島　大脇商店發行

八丈島における古今沿革、島勢、地理、産業等を記す、今はこの島の畜牛が第一の産業となり且總ての食糧において豐富なることは昔時の罪人捨場であつたに比して月鼈霄壤の變化を來して居る。

**小笠原遊覽圖會**　洋裝　假綴　一冊　四六倍判本

明治三十九年　東京　東陽堂發行

風俗書報の增刊として發行された書入の島誌である。



## 相模國の部

### 相州七湯之栞　寫本　十卷　三冊　大　本

文　聰校正　弄花書輯　文化八年稿

地誌目錄本篇に「函根七湯圖會」十帖として載せたものと同一作者で順序も略ぼ同樣である、彼は彩色の密書を主として敍事を略記してあるが、此は挿書には景書のみを載せ敍事を詳記しある、即ち記文には七湯並にその附近の地理名所を敍述し物產その他の事にも及んで居る、恐らく德川時代の箱根案內記としては最も精密なものであらう。

本書によりその完稿が文化八年であり、又記事は文聰主人挿書は弄花主人なることを明にしたが兩人ともその本姓名を勘えるに至らぬ、現本は東京加賀豊三郎君藏本によりて傳寫した。

### 箱根山溫泉圖會　一　冊　中　本

弄花山人撰並書

弘化四年　江戶小梅邑鳳醉堂圓助、村上喜右衛門、和泉屋庄次郎板

別項「箱根七湯栞」の抄略本を刊行したもので同一人の同一序文を載せてある、その中に「七湯のしほり」と號し云々と記してあるが題簽にも内題にもそれが見當らない、卷頭には箱根七湯溫泉塲圖（墨書）七面あり、又卷尾に各湯塲の特効を記し又四季考の題を以て入湯時々の季節による產物などを擧げてある、僅に十九丁の小冊子である。

## 東雲草　前後二冊　中本

雲州亭橘才撰　文政十三年序　自己出板

富める醫家の隱居にや宮城野に半年滯留して箱根山中の溫泉や名所を探杖した記である、先づ大磯から筆を起して箱根芦の湖までを記してある、夙に諸國を往來してその國狀に精しく且史誌に通じて居ると見えて、その說くところは虛誕を排して事實を傳へて居る、又山中の草類につき智識があつて說くところ確かである、芦の湯の背後辨天山といふに今も浴客が遊步がてらに登る丘上に報恩碑といふが立て居る、この碑につき一の溫泉佳話ともいふべきがある、この碑今もあるや餘り他の書に見ない。

本書自筆自書本で刊記や書肆名記入の奧付がないのは自家出板のためであらう。

## 箱根山地誌御調書上控帳　寫本一冊　中形横本

石内　某編　天保四年記

元箱根の舊本陣石内氏が天保四年幕府學問所に差出したもので豆州三島新町から相州小田原板橋村まで箱根八里の山道分見圖に街道西側の地理名所名物を詳記した帳である。



## 塔澤溫泉紀行　一冊　中本

跡部良隆撰

享保六年　江戸　平野屋勘兵衞板・木原甚四郎板

この書は地誌目錄本篇に掲げた「伊香保紀行」の下冊を單行本に裝つたものである、跋文には伊香保紀行の後に附すとあるので知れる、入浴は天和三年で粗畫數葉を挿む。

## 塔之澤御紀行草稿　寫本一冊　中本

著者年代不明

江戸在勤のある大名が公許を得て箱根鎌倉に遊ぶ風流紀行文である「御紀行草稿」としてあるがこれはその臣下が題簽に書いた名題である、年號を記さゞるも幕末のものらしい。

## 函山誌　洋裝假綴一冊　四六判本

松井鎧三郎著

明治二十七年　箱根町遠州屋發兌

温泉案内記であるが箱根町元箱根の誌に重きを置いたところに他の類書と異つた點がある。(大阪船越政一郎君惠贈)

## 函山紀勝　一冊　白紙　小本

龜谷省軒著

明治二十一年　東京　吉川半七賣弘

箱根遊浴の詩文と付鎌倉懐古とを載す、著者は對州の學者である。(大阪船越政一郎君惠贈)

## 小田原と箱根　洋裝　假綴　一冊　四六判本

日本歴史地理學會編

明治四十二年　小田原　平井積善堂發行

學界の専門家連がこの年開かれた學術講演者の聴講會のために歴史地理を主とする通俗案内記として編輯したのであるから普通の案内記と撰を異にしたところあり、材料挿畫にも他にないものが加てある。



## 英勝寺記　寫本　一冊　中本

編者不明　寛永年間記

英勝寺は鎌倉の禪尼院である、水戸藩祖の養母英勝院の創建で且つその廟所となつて居る、本書には林道春の寺記を初め金石文や京鎌倉の高僧等の英勝院追悼偈等を載す。

## 鎌倉大觀　洋裝　假綴　一冊　四六判本

佐藤善次郎撰

明治三十五年　鎌倉　松林堂書店發行

## 江之島名勝　一冊　小本

端館紫川書

明治三十三年　東京　紀友梓

明治中期には珍らしい繪入木板摺の案内記で内題には「江之島名勝雜記」とある。

## 相模國分寺志　洋裝 假綴 一冊　菊 判 本

中山毎吉、矢後駒吉合著

大正十三年　高座郡海老名村役場藏板

著者中山毎吉氏は郷土研究者で同時に有名なる國分寺研究者である、本書は全國の國分僧尼寺につきその歷史、制度以下を考證論述し、更に高座郡海老名村の高臺に現存する僧寺尼寺の遺址よりその建立當時を歸納して立派に相模國分寺の研究を遂げたのである、尙附近の古寺、史蹟、古墳、豪族の興亡等を文書と實蹟より證明した一節もある、現今小田原急行電車はこの國分寺の極く近いところに停留場を設けてある。

## 足柄上郡誌　洋 裝 一 冊　菊 判 本

大正十二年　足柄上郡敎育會編並發行

この郡は東海道線の松田驛を中心とし足柄連山の麓にある地方で上古の東國官道はこの郡內を通じて居た、今の關本は延喜式に載する驛址で足柄の古關は直ぐ附近にあつた、從てこの地方の社寺舊蹟には鎌倉時代からその以前に遡る由緖のものが多い、必ずしも精細ではないが郡內の古跡を遍く記してある。



# 武藏國の部

## 四神地名錄(異本)　寫 本 二 冊　中 本

古川　辰撰　寬政六年原序

地誌目錄本篇に一本を載せたがこれは異本である、この書荏原郡より始まり葛飾郡にて終り郡の序列に異同がある、又本篇に載せた一本には「品川再覽」とあるもの本書には「荏原郡拾遺」となつて居る、本篇本は著者の郷里備中から得た古本で由緖ありさうに思はれたが現本もまた原著時代を餘り隔らざる寬政十一年の書寫であるから捨てがたく思はれる。

## 四神地名錄(異本)　寫 本 四 冊　大 本

古川　辰撰　寬政六年自序

これまた異本である、外題に四神地名錄とある上に「江戶近郊」の四字を冠してある、本文には格別の相違を見ないが、本書は豐島郡に始まり足立郡に終つて居る、且その卷末に附錄として「荏原郡之記」といふがある、別本の「品川再覽」又「荏原郡拾遺」と同一である。

## 續武藏野話　　三冊の内　二冊　　大本

齋藤鶴磯撰

文政十年　江戸　須原屋茂兵衛、同伊八出板

武藏野話第二編は筆禍事件のため絶板されて流布本が極めて稀である、この第二編には第三編嗣出の豫告もあるが無論出て居らぬ、地誌目錄本篇には武藏野會出板の縮刷本に收錄されてある第二編を採つて載せてをいたが、玆に中卷缺冊の原本を得たからこれを掲げてをく。

この續篇の第一冊は入間郡の部で缺冊の第二冊は高麗、豐島、新座、比企、足立、埼玉、橘樹、都築の諸郡、第三冊は多摩、兒玉、男衾、賀美、横見、大里、秩父の諸郡を記してある、例により板碑その他の金石文のことを記しその寫生や村落の景觀を圖す。

## 武藏野名所考剳記　　寫本一冊　　中本

前田夏蔭撰　文化十二年自序

松平冠山の「武藏名所考」に載するところの名所異同や歌人の傳記につき疑はしき點をあげて自家の說を述べたものである、本書は大阪府立圖書館藏本を以て書寫した。



## ひともと日記<br>武藏地名考　　合一冊　　中本

田澤義章、釋　法輪共撰

享保廿一年（元文改元）跋　書肆名不記

田澤義章の「武藏野地名考」は地誌目錄本篇にその單行本を載せた、本書はその地名考に揷書をかいた筑波山下の僧法輪が義章の住する今の北多摩郡向ヶ岡を訪問する「一本日記」とを併せて一冊としたもので原題箋にも二題を併せ貼付してある「地名考」は單行本と對照して二三の追加記事が見える、現本には刊行書肆名を載せないが恐らく後の追補板と思はれる。（大阪江崎政忠君惠贈）

## 武藏野歷史地理　　洋裝三冊　　四六判本

高橋源一郎編

昭和三—五年　東京　武藏野歷史地理學會發行

第一冊は總論と東京北郊、第二冊は東京西郊及び西南郊、第三冊は西南郊の續きと南武藏野卽ち北多摩郡の部で以下續刊の豫定である、郡村の歷史から古城、社寺其他史蹟名勝につき地理沿革を細說す。

## 武藏野巡禮　　洋裝一冊　　四六判本

白石實三撰

大正十年　東京　大同館發行

東京周圍の遊覽記である、地理に重きを置くといふも叙情的紀行文集である。

## 淀橋淨水池幷名勝一覽　　一冊　中本

福羽美靜撰　明治廿六年記

東京郊外淀橋に新なる淨水池設けられ市內百五十萬の人口に水道を供給すると威張つた時の記である、その淨水池畔に居を構えた著者が附近の名所十二社明神、井頭池、銀界界等を紹介して併せて自己の寓居を吹聽し「このうちは庭先狹し席狹く尻長き人注意ものなり」とやつて居る、當時の歌人のくだけて新居を知人に報じた冊子であらう。

## 北武藏名跡志　　二卷　　埼玉叢書第一卷收錄

富田永世撰　安政年間稿

昭和四年　東京三明社發行

埼玉縣で縣史編纂資料として蒐集した古書の或部分を埼玉叢書として刊行したその第一卷に本書を收錄してある、武藏の內兒玉、大里、秩父、比企四郡の全部と北埼玉、足立兩郡の一部につき郡村別に史實名族、古城、古碑等を記す、本書に自序あれども年號の記入がない、嘉永六年に出板された「上野名跡志」の自序中に「六十にあまりて云々」とあり、本書の序文にも同樣「六十にあまりてものうさも云々」とあり、また「上野國の部は先たちて書おへたれど云々」とあれは多分安政年間の稿であらう。



## 八王子十五組地誌　　謄寫版本　中本

植田孟縉撰　文化十一年(?)記

大正十五年　八王子史談會發行

校訂者の解題によればこの書記名なきも植田孟縉の著「八王子橫山十五宿名蹟拾遺」と內容記述殆んど同一であるから同一著者の手になつたものであらうといふ、本文の初めに十五宿の地圖があつてこれに文化十一年記とある、管內町村の由來、舊蹟、寺社、古塚金石文等を記す。

## 八王子　洋装 假綴 一冊　四六判本

大正十五年　八王子市役所編並發行

卷初に八王子の古來沿革が少しく載せられてある外は、大部分市の現勢一班を記するに過ぎぬ。

## 玉花勝覧　二冊　小本

露庵有佐撰

文化元年自序　江戸　花屋久次郎板

小金井櫻堤の案内記で内藤新宿を起點とし小金井橋を中心に花見をなし歸途府中の六所明神に參詣して戻るまでの見取圖を入れてこれが紀文あり、所々に俳句を挿む、序文の初に「武藏野多摩郡金橋のほとりなる櫻は寛永のむかし植させ玉ひしとなむ又元文の頃植添ありけるとかや今は前後のけぢめなくともに老木となりぬ」云々とあり。

家藏本二冊は一冊づゝの書にて異本である、著者も書肆も刊年も皆な同一であるが本文には多少の增減がある。



## 武藏國分寺址の調査　洋装 假綴 一冊　四六倍判本

大正十二年　東京府編並發行

史蹟勝地調査報告の第一冊として鷲尾順敬氏の調査したもので中央東線國分寺驛の附近にある武藏國分寺につき沿革、遺址、遺物の三項目を細述し多くの實測圖や現狀遺物等の寫眞を載す。

## 武藏國府名蹟誌　洋装 一冊　四六判本

大正五年　府中町青年會編並發行

國分寺村府中町等玉川沿岸東部は古來武藏野中の中心地であつた、從て古蹟や名勝が頗る豐富である、本書は國分寺、府中大國魂神社、小金井櫻堤その他地方の社寺につき由緒と現狀を紹介す。

## 高尾山之記　寫本 一冊　中本

著者不明　文政二年記

高尾山には天平年間以後藥師の古道場として藥王院あり、これに飯繩權現が祀れてある、この一寺一社を中心としてその末社末院、山上の構營を記し、又山川、文苑、寶物、古文書の影寫などあり、本書は著者並に著作年の記載なく、内題の下に當山十八世現住秀神とあるもこれは著者ではないやうである、

本文中に天平十六年より今に至る一千七十五年とある文字により著作年を推定が出來る。

## 郊外 碑文谷誌　洋裝一冊　四六判本

富岡丘藏著

昭和四年　東京　嵩山房發行

碑文谷は東京の郊外にある古き由緒をもつ村である、昔の法華寺今の圓融寺といふ天台宗から法華になり更にまた天台に戻つた喧しい寺がある、村の成立も沿革も皆なこの寺を中心として居る、本書の大部分はこの法華寺史を以て編せられ、またこの村の產土神八幡神社のことを記す、附錄として「武藏風土記稿」と「東京府志料」とに載する碑文谷村の全文、前戸長角田長廣編の碑文谷村誌全文を載す。

## 東京府史蹟名勝天然記念物調査報告　洋裝假綴七冊　四六倍判本

大正十三年―昭和四年　東京府編並發行

第一冊は前記の「武藏國分寺址の調査」である、第二冊は府下における老樹大木の調査、第三、四、五冊は重要なる史蹟調査、第六冊は三多摩の史蹟就中近年特別保護建造物に指定された正福寺佛殿につき



詳記し多くの圖版を載す、第七冊は東京市を中心とし近郊にある「名家墓所」にて其略傳と墓碑の寫眞を掲錄してある。

## 武野八景　一冊　中本

大久保忠休撰

寛政九年　江戸　前川六左衛門、北奥甚助刊

多摩の八景を選びその地解、景書、諸家の八景詩を錄したものである、八景とは六所揷秧、立野月出、玉川觀魚、函崎舊池、吾庵疊翠、宅部寒雁、將塚暮靄、金橋櫻華である。

## 玉川の日記　稿本一冊　小本

千尺居蔦盛撰　文化十年記

小金井に觀櫻し六所明神へ參詣した騷客の紀行である。

## 江西三十八勝詩歌　一冊　中本

太田子德編　嘉永五年序

江西とは江戸の西である、載するところは玉川瀬田村占勝亭八勝、瀧轟山近境十勝（等々力村滿願寺の周圍）洗足十二勝、終南山八勝（鵜木村光明寺）等にて太田子德の歌、釋獅絃の詩其他の詩歌に略書名勝案內を添えた騷客の玩書である。

## 川越索麪　寫本 五卷 一冊　中本

板倉良矩撰　寬延二年稿

川越の古地誌で町々の由來や舊蹟、墳墓、名木等を記し、各項につき昔の有樣や古事を叙すところ古老の語るを聽くやうである、本書の奧書に

右此書は板倉善左衞門良矩著作にして未成の書なり寬延二年己巳歲二月十日いまだ稿を脫せずして卒す行傳寺に葬る、その嗣子にその草稿を借り寫す書中朱書の删訂あり本書文と朱書とそのまゝに寫し又其删定に隨て本文を改るところもあり、右之書借り早々寫し候故亂筆也

寶曆十六庚辰年九月

書おくもあわれとも見よ筆のあとなからんすへはあわれとも見よ

とある、此書多くの書籍目錄に著者未詳とあり、現本によりて其著者を知り得た、且その起稿後餘り年



月を經ざる寫本であるから傳誤も少いやうである。

## 川越索麪（異本）　寫本五卷一冊　中本

板倉良矩撰　寬延二年稿

現本は前項と同一本であるが第三卷の記事を第五卷とするなど前後あつて記文にも多少の增減がある、著者及び年代は別本の記載によつた。

## 川越松山記　寫本 一冊　大本

獨笑軒立義撰　文化十五年（文政改元）稿

本書地誌目錄本篇に擧げた「川越松山遊覽圖誌」と同一本である、遊覽圖誌は最初の序文に缺紙があり且この書は「武藏野話」と双璧たる良書であるから補正かた〴〵更に得た一本を併せて登錄しおく。

## 御嶽山一石山紀行　寫本 五卷 五冊　大本

獨笑軒立義撰　文政十年序

「川越松山記」や「日光巡拜圖誌」やその他關東方面の旅行記を作した同じ人の著作である、この紀行

は青梅より多摩川の流を遡り御嶽山に詣で氷川神社に賽し、更にその奥倉澤や日原に跨る一石山の巖窟を見て、歸路多摩川上水の水路に沿ふて江戸にかへる旅行記である、今日は自動車路もあつて都人士の清遊地になつてゐるが當時山村の質素淳朴の狀態がよく描寫されて居る、尙本書には沿道の風景や社寺の配置が彩色を以て多數挿入されて居る。

### 多濃武の雁

大陽寺盛胤撰　寶暦三年稿　一　卷　埼玉叢書第二收錄

川越の地誌彙雜記である、著者は川越城主秋元涼朝の家老で文才があつた、當時の城下町の狀況を精しく記し特に侍屋敷の方面が密に載せてある。

### 百穴の記　和裝活字本一冊　中　本

鈴木弘恭撰　明治廿八年記

吉見百穴檢分の紀行彙調査記で百穴が穴居の址とも横穴古墳とも議論の一致しない時代著者はこれを住居後の葬處と斷じて居る、同行の小中村清矩博士は歸後古墳説に傾いた、今日では殆ど古墳説に決定して居る、內務省の史蹟名勝調査報告第四に發表された柴田常惠氏に從へば今や古墳説に異議を挾むものはないとある。



### 松山城とその城主　洋裝　假綴　一冊　四六　判　本

關口兒玉之輔著並發行

松山古城は後北條氏時代の北武要害地であつた、その城主の興亡を記し、附錄に秩父皆谷八景の記あり

### 北武八志　和裝活字本五卷一冊　菊　判　本

清水靜修撰

明治四十年　忍町　川島書店發行

北武とは北埼玉、大里兩郡の邊にて舊忍藩の領地のことである、本書にはその範圍にある神社、世家、人物、城塞、古物、古蹤、墳墓、佛寺の八志を編述したのである。

### 忍の行田　洋裝一冊　菊判本

石島儀助著

昭和二年、北埼玉　行田時報社發行

忍は北武藏の小邑であるが幕府時代には親藩又は譜代諸侯の封地であつた、本書はその現勢と舊藩時代の沿革を叙す。

## 須加村如來堂紀行　一　冊　中　本

沙門悟海撰　嘉永元年自家出板

上野東叡山某院の住僧が有緣なる埼玉郡忍の須加村如來堂に來つて勸行する記である、須加村如來といふは忍名所圖會にも阿彌陀堂として詳しい記がある、東叡山とは深い緣故があつた、著者はこゝに暫らく滯在して附近の寺を訪ひ、去年信州善光寺にて大地震に出遇ひたるを追懷し或は元祿年間この寺の本尊を庭中より掘出した百姓與右衞門夫妻の墓が絕ねて久しく不明なりしを發見する記などがある。

## 熊谷宿往還通明細書上　一　卷　埼玉叢書第一收錄

寬政十二年記

忍藩領たりし大里郡熊谷宿から幕府に差出した熊谷町の道路筋、驛務、地方狀勢、社寺の明細書である。



## 深谷古來鑑　一　卷　埼玉叢書第二收錄

著者不明　文政五年記

深谷町の變遷とその明細を記するもので文政五年頃まで記述が見える。

## 訪瓱錄　二　卷　埼玉叢書第一收錄

渡邊華山撰　天保三年稿

天保三年正月渡邊華山がその藩主たる三州田原の三宅侯の命を受けてその采地たる大里郡瓱尻村を巡見した報告書である、村名の由來、風俗、物產、村內の古跡社寺等を取調べ卷首に得意の寫生書を載す。

## 武乾記　三　卷　埼玉叢書第一收錄

根岸義弘記　安永三年自序

武藏榛澤郡大塚村住の著者が武藏の乾の方角にあたる兒玉大里二郡の巡見錄であるが主として各村と名族の關係を記す。

## 見沼通船堀開鑿發端並風聞記　一　卷　埼玉叢書第一收錄

天保八年記

足立郡見沼用水と惡水路とを連絡する見沼通船堀開鑿工事の記錄である。

## 埼玉郡廣田村開發誌　一　卷　埼玉叢書第一收錄

新井彌左衛門記　寶永四年稿

本書の題名を「廣田村開發並に西光寺開創由緒」といふ。同村開發者の一人たる著者が自己の家の記から村の開發のことを子孫に傳へるため書殘した記である。

## 埼玉縣史蹟名勝天然記念物調査報告　洋裝假綴二冊　菊判本

大正十五年―昭和三年　埼玉縣編並發行

第一、二輯を缺き第三、四輯である、第三輯には枕草子や古歌に有名なる堀兼の井が涸水の現狀を示し其他城址、古墳、鎌倉街道の調査、第四輯には城址、一里塚、人物の出生地、遺蹟等を記す。

## 武州諸寺社緣起集　洋　裝　一　冊　菊　判　本

埼玉縣史編纂事務所編

昭和四年　東京三明社發行

埼玉叢書第三冊は三峰山、川越喜多院其他埼玉縣下にある古社寺の緣起由緒八十餘種を集錄した一冊で



あるが一々登錄するの煩を避けて一括かく命題しおく。

## 秩　父　志　十　卷　埼玉叢書第一收錄

大野玄鶴撰　明治二十年稿

本書は天保年間より稿を起し漸次追補を重ねて明治二十年に完成したといふ卷初に漢文の自序がある、首卷に秩父の建置、沿革、氏族略譜、郷村名、山川、社寺名を載せ以下東南、中央、西北、嶺外各二卷、尾卷等併せて十卷より成る、各村別にその位置、社寺、古城、古墳墓、碑文等を記し、所々に寫生畵を挿む、秩父の地誌として頗る詳審である、本書舊名を「秩父觀跡志」といふ。

## 增補秩父風土記　一　卷　埼玉叢書第二收錄

源山壽補校　明和安永頃

秩父風土記はもと秩父郡薄村の祠官北島伊勢なる人の作であると傳ふ、それを校訂者が明和安永頃漸次增補したのである、各治領を主題としてその下に各庄村のことが簡單に記してある。

## 秩父三十四所觀音靈驗圓通傳　五卷　六冊　大　本

沙門圓宗撰

延享元年　江戸　辻村五兵衛、上村勘兵衛梓

秩父の沙門圓通が延享元年撰する片假名交り本である、秩父禮所の沿革由緒を記し又敎化の意をこめてある、秩父巡禮に限り三十四所となつて居るのは西國坂東各三十三所にこの秩父を加へて百ヶ所とするためである。

埼玉叢書には明和三年大阪書肆求板發賣の本を以て底本としてあるが現本はその初板である、この書の奥付には「追考觀音靈驗圓通傳大成全部十二冊追而出來」とあるが果して發刊されたるかを知らぬ。

## 秩父大觀

洋裝　假綴　一冊　四六判本

江森泰吉著　大正二年　東京東西時事社發行

## 秩父案內記

洋裝　假綴　一冊　四六判本

野原廣仲著　大正十四年　秩父町時聲社發行

## ちゝぶおりもの

洋裝　一冊　四六判本

大正五年　秩父絹織物同業會編並發行



## 埼玉縣秩父郡誌

洋裝　一冊　菊判本

大正十四年　秩父郡敎育會編並發行

一般沿革と町村誌より成る、本書には埼玉縣最大の板碑卽ち樋口村の天道大日如來碑應安二年在銘高さ一丈六尺七寸の寫眞圖版が載せてある。

## 武藏國兒玉郡誌

洋裝　一冊　菊判本

小暮秀夫編

昭和二年　本庄町　兒玉郡誌編纂所發行

武藏七黨の叢淵、塙撿校の出身地、金鑽神社の祠所等中世から近世にかけて關東の生粹を有する地方郡誌でその史的關係が比較的細かに現はれて居る。

## 入間郡誌

洋裝　一冊　菊判本

安部立郎編

大正元年　川越町　謙受堂書店發行

入間郡は川越町を中心とする武藏野の一郡であるが、江戸開府前には川越城によつて武藏の中心となつ

て居た、この書はその沿革と各町村の地理古跡を叙し郡勢などに觸れぬところに地誌として比較的多くの資料を含む。

## 南足立郡誌　洋裝 假綴 一冊　菊 判 本

大正五年　南足立郡役所編並發行

千住町を中心とする十ヶ町村の小郡の地方誌である。

## 横濱の史蹟と名勝　洋裝 假綴 一冊　四六 判本

栗原清一撰

昭和三年　横濱郷土史研究會發行

横濱叢書の第一卷として發行された、横濱と郊外の史蹟名勝を簡單に多くの小形寫眞版を入れて説明した小冊子である、震災によりて全滅した地方のことであるからその現狀と舊形とを比較して回顧するところに此書の特色がある。（東京中道等君惠贈）

## 横濱八景詩書　一 冊　中 本

平塚泰亮編　永海書



明治三年　東京　須原屋茂兵衛外八店刊

八景とは海岸碇泊、天妃進香、磯見殘雪、本牧待月、淺間邱遠眺、野毛櫻花、吉田橋晩涼、石川夜雨でその書を挿み卷末に清國人玉露山人の八景詩を載す。

## 横濱開港五十年史　上 下 二 冊　菊 判 本

肥塚 龍編

明治四十二年　横濱商業會議所發行

上卷は德川時代の開港史、下卷は明治時代の發展史である、資料として載せる圖版には萬延元年の横濱全圖の寫眞を始めとし珍稀の書圖が多數ある今やその大部分は灰燼となつて原物を存しないのであらう

## 横濱沿革誌　洋 裝 一冊　菊 判 本

太田久好著　明治二十五年發行

横濱開港の安政六年以降重なる事件、港市の發達變遷を叙す、開港當時の珍談を多々語り終りに諸職諸商人名鑑あり。

### 横濱近郊文化史　洋裝一冊　菊判本

石野　瑛撰　昭和二年　東京文學社發行

多摩川以南から金澤まで横濱を中心とする近郊の史實文化を上古より大正の大地震まで時代別に詳述したもので歷史を叙しつゝ地理を語り古墳、社寺、名蹟は近代產業の方面にも及んで居る、卷中に古文書古圖現代寫眞を加へ南武藏の歷史的地理を知悉することが出來る。

### 横濱築港誌　洋裝一冊　菊判本

明治廿九年　臨時横濱築港局編並發行

內務省が顧問英國技師パルマーの設計によつて施設した第一期築港工事の概要を記したもの。

### 武相考古　洋裝一冊　四六判本

石野　瑛著　大正十五年　東京　坂本書店發行

神奈川縣に屬する武藏と相模にある古墳、古戰場其他史蹟につき實見の記文と調査研究を集めたもの。



### 杉田日記　一冊　中本

清水濱臣撰　文化七年　江戶　岡田屋嘉七板

文化四年の正月濱臣は杉田の觀梅に出掛けた、平凡な紀行文であるが中に同年少し前に觀梅に來た狩谷棭齋が醉筆で出鱈目の梅花の書をかいたことが出て居る。（大阪江崎政忠君惠贈）

### 鮫洲抄　一冊　中本

春秋樓編　天保十二年序

荏原郡鮫洲の泊船寺に芭蕉堂あり、堂側に建碑した俳人連の句を集めたもの、卷初に寺記と芭蕉堂誌を載す。

### 遊大師河原記　稿本四冊　中小本取交

今井有隣撰　天保十四年個人出板

六鄉川口の大師河原紀行の詩文を板行するための大小二冊の板下本とその刊本一冊、これに同一著者の

「遊香取記」の板下本一冊を付す。

## 川崎誌考　　洋装一冊　　菊判本

山田藏太郎撰

昭和二年　川崎市　石井文庫發行

六郷川畔に建設された新市も汎濫によつて幾回地形を變更したが石器時代の遺跡もあり、上代からの歴史も無論ある、德川時代に入りては江戸府の咽喉となつて幾多交通上の歴史がある、本書は郷土研究家の研鑽になつたもので川崎を中心とし主とし京濱間の古代沿革を考へたものである。

## 穴守稲荷神社緣起　　一冊　　小本

明治三十七年　羽田村　金子市右衞門編並發行

六郷川尻の羽田にある穴守稲荷が盛に信仰された時に出來た緣起兼案内記である。

## 神奈川縣橘樹郡案内記　　洋装　假綴　一冊　　四六判本

大正三年　橘樹郡役所編並發行

川崎から程ヶ谷にかけて東海道筋の現勢と地理名所を記する案内記である。



# 江戸、東京の部

## 江戸雀　　十二巻　十二冊　　大本

菱川師宣撰並書

延寶五年　江戸　鶴屋喜右衞門板

本書江戸板名所記本の泰斗である、既に地誌目錄本篇に載せて置いたがあれは七冊の合冊本であつた、然るにその後題簽つき原表紙の良本を入手したから前者を省き新に十二冊本を登錄すると共に各冊の題簽文字を列記する。

巻一　江戸もとめ　御城の始り同大手口屋敷付　　巻二　江戸須々女　糀町番町筋駿河台の分

巻三　江戸雀　町中案内　　巻四　江戸壽々め　日本橋より金杉迄の分

巻五　江戸すゝ兊　大芝の分　　巻六　江戸須々め　赤阪四谷市谷の分

巻七　江戸雀（行書）牛込の分　　巻八　江戸寸々女　小石川の分

卷九　江戸はゝ先神田　　　卷十　江戸もゝめ淺草の分
卷十一江戸すゝ先本庄ろ分　卷十二江戸雀本庄北分

## 慶長年間江戸圖說　　寫本一冊　　大本

中神守節撰　　文化十二年稿

この書地誌目錄本編に載する燕石十種收錄の「慶長年間江戸圖考」と同本である、題簽には圖說とあるも內題には矢張り圖考となつて居る、今この兩者を比較するに燕石十種本には「玄同放言中にある長祿長享年間古圖といふを排してこの圖考の最も古きことをいへる文を取りて卷首に載す活東子」として序文にかゆる一文があるが本書にはこれなく唯だ本文の終りに

乙亥仲秋　　梅龍園主人しるす

右慶長中江戸圖の說あるひともとめに應じてしるしぬこの圖にのする諸役人等のことは別に考ありと識語がある、燕石十種本にはこの識語なく別に「慶長年間御曲輪內圖說」といふを附錄とし諸役人のことを記す、卽ち別に考ありといふがこの曲輪內圖說のことであらう、而して曲輪圖說の終りに「この圖考は文政十三年の冬內命ありて江戸古圖を調進せし時地誌局において集錄する處なり鄙盛の暇密に記して參考の補とす」とある。



## 江戸圖鑑綱目　　一冊一舖　　大本

石川流宣撰並圖

元祿二年　　江戸相摸屋太兵衞出板

景繪や地圖作成につき當時の妙手といはれた石川流宣の彩色塗沫の江戸大繪圖であるが其特色は圖の劃內に餘白ある部分に社寺建物その他相當の書樣をあしらひて人目ににぎはしく作つてあることだ、附屬の一冊は江戸內外の異名所書、神社の神主別當、寺院の山號院號、諸職諸藝、特種作工人の列名住宅等を表記したものでこの一冊を乾として繪圖を坤としてある。

## 江戸總鹿子　　七卷合一冊　　小形橫本

松月堂不角撰

元祿六年板　　書肆名不記

總鹿子は貞享四年板の「江戸鹿子」を增修して元祿二年に發刊したもので一方にはまた元祿三年に「江

戸總鹿子名所大全」六卷八冊本が出て居る。

現本には著者不角の元祿二年の序文を載せ卷尾の跋文に次で元祿六酉歲九月吉日とあつて書肆名を削つてある所を見れば再板本であることは明である、これを名所大全と對照するに本書は七卷となつて居るもその第一卷は第二卷の目錄を載する數葉に過ぎぬ、第二卷から本文になつて居るがこの卷の外は第三卷以下各卷とも初めに目錄を備えて居るから實は七卷は卽ち六卷と同じことである、しかし全卷を通じて記文の序列に幾分の相違あり板木は全く別である、且本書は名所大全よりも遙に拙なる書が多數載せてあることも著しく異つた點である。

「古版地誌解題」には本書の大阪書林市兵衛板といふ取つて居るがこれも後板ものらしく思はれる。

## 新篇江戸志

寫本十一卷十冊　小本

近藤義休撰　寛政年間稿

當目錄本篇に六冊本を收めたがその後雲煙家藏書記の藏印ある東京鹿島家の舊藏本を入手したから異同校合のためこゝに載せて置く。この本にも著作年月の記入なく著者の本名を明かにせず、東武懐山子輯著、塵積校正とあることと別本と同じことである。



## 御府內備考第二

自廿五卷至四十六卷　大日本地誌大系收錄

三島政行等編　文政十二年稿

昭和四年　東京　雄山閣發行

地誌大系再刊本の一冊として發行された、第廿五より第四十六卷に至る二十二卷を收錄してある、下谷の根津谷中、神田湯島と本鄉小石川方面を記す。

## 聖堂之繪圖

一　舗　大形　折本

菱川師宣書　元祿四年板

德川綱吉將軍は從來向岡林羅山の邸內にあつた聖堂を昌平橋畔の湯島台に遷してこれを幕府學問の根本道塲とした、その竣工は元祿四年二月であつた、この時將軍親しく臨んで開堂式を行ひ又經書を開講した、しかし其後聖堂は數次火災に罹り最後の建築は寛政十一年であつたがそれすら大正十二年の震火に灰燼となつた、本圖は元祿四年閏八月の出板であるから開堂後間もなく出來たものである、文宣王を初め列聖の像書あり、又街路上の人物、講義の有樣など師宣の麗筆が揮はれて居る、此圖出板書林名がない。

## 武州東叡山瑠璃殿記　　一冊　大本

公辨法親王撰　元祿十二年板

上野寛永寺莊嚴の中心であつた瑠璃殿は天台座主第五世門跡公辨法親王のために將軍綱吉が奉献したものでその落慶に當り法親王が親しく記を作り梓に上ぼせたのである。

## 江都歩行　　寫本一冊　中本

松平冠山撰　年號不記

江戸の名蹟社寺につき一行一覽のたびごとに簡略にその來歷由緒を記した地理隨筆のやうなもので未定稿になつて居る、神田橋より北に行き又吳服橋から東にも向つて居る、即ち神田、本郷、下谷、淺草、日本橋・本所の町々とその郊外數里の邊を記し、未だ南方から西方には及んで居らぬ、此書一名を「三餘一覽」と稱する如く序文に見ゆ。

## 南向茶話　　寫本 乾坤 二冊　中本

酒井忠昌撰　寛延四年稿



乾の卷は南向茶話、坤の卷は同追加である、地誌目錄本篇には燕石十種收錄本によりて載せ本卷は向陽故名亭、追考は酒井忠昌著であることを記したが、現本には兩卷とも酒井助之進忠昌撰としてある、この茶話は江戸の由緒を問答体に記し追考にはその漏れたるを補つて隨筆体に地名社寺人物金石文等を舉ぐ。（大阪本山彥一君惠贈）

## 隅田川古圖考　　稿本一帖　大形折本

古庵糸亦撰　文政十一年稿

外題に「葛の葉草」とあるが何の意味なるや、內題に記するところをとつて表題とした、隅田川と古利根川との流域の想像圖を彩色にて記し、武總兩國の葛飾郡を初め足立、葛西、豐島諸郡の村名などを現はしてある、この圖によれば隅田、利根、大井の三川合流して今の江戸川筋となり下總國府の邊を流れて海に入り、今の葛飾郡の村落は多くの洲嶼に分れて居る、記文古老の口碑や東鑑紫の一本等を引いて諸村が島の洲や新土であつたことを述べてある、地誌としては「浪速上古圖說」よりも一層賴りなき記文で恐らく俳諧者流の筆すさみであらう。

## 大東京の史蹟と名所　　洋裝一冊　　四六判本

佐藤太平著

昭和五年　東京　博文館發行

市內篇と郡部篇とに分ち東京市を中心に府下の史蹟名所を網羅し寫眞や古書を入れて簡略に說明してある、社寺墓所等大震災以後の變化も考へられて居る。

## 江戸名所圖會畫稿　　一帖　　大形折本

長谷川雪旦書

大正十二年　東京　米山堂發行

江戸名所圖會の畫師長谷川雪旦の構圖殘稿を影本にしたのである、構圖は名所圖會卷二の兩國橋や卷二十龜戸天神國府臺附近の寫生である。

## 江戸方角名所杖　　一冊　　小本

又玄齋南可撰　立祥書



年號不記　江戸　大和屋喜兵衛板

「江戸方角名所」に種々の冊子がある、その二三は地誌目錄本篇に載せた、これもまたその一である、此書には口繪に江戸ッ子風俗と江戸方角圖の彩色畫を入尙所々にコマ畫が挿むである、刊記なきも安政頃のものらしい、現本には初篇とあるが內務省地誌目錄にも一冊とあるから二編以下は刊行されぬのであらう。（大阪船越政一郎君惠贈）

## 江戸方面地名說　　一冊　　大本

淸梅園船盛撰　年號不記

江戸方角を讀本兼習字用に作つた冊子である、年號を記さないが寺門靜軒か靜軒老人として序文をかいて居るから幕末の出板であらう。

## 東都紀行　　四卷　　新燕石十種第二收錄

辻雪洞　享保三年自序

本書編述の動機は江戸の發展につれて諸侯歷々の邸宅漸次多くなるので江戸在勤士衆のためこれが案內として「第宅便覽」といふを作つたが尙引續き江戸の內外を精しく探索する間に邸宅を知り社寺名勝を

訪ひなどして紀事累なり終にこの日記体の江戸案内記が出來たのである、卷中詩歌を交え地理を說くこと極めて精細である、小宮山昌玄この書に識して

此書地誌備用典籍無著錄蓋當時末甚行于世今閲之多諸書不及傳者豈可珍重矣、

## 繪本吾嬬鏡　上中下三冊　中本

北尾政美書

天明七年　江戸　鶴屋喜右衛門板

江戸の名所社寺を彩色にて書き餘白に當時の騷客の狂歌狂詩などを加ふ。寫實の描法で眞景が現はれて居る。

## 江戸花暦　一帖　小形折本

きゝすのや則房撰

天保六年　江戸　須原屋茂兵衛、同伊八、北島順四郞刊

四季の風景を口繪とし以下每月の花暦として諸々の名所遊覽地を列記す。



## 江戸砂子補正　一卷　新燕石十種第一收錄

加賀美遠懐撰　年號不記

「江戸砂子」の誤謬をたゞし又脫漏を追補したのである、この書年號を記せざるも安政の文字がある。

## 泰平御江戸町鑑　一冊　小形横本

松栢堂主人編

安政五年改板　江戸　出雲寺藏板

地誌目錄本編に載せた天保十三年出板の「江戸町鑑」に人名等の改正を加へた同本である。

## 改正まちずくし　一冊　小形横本

年號不記　江戸　本屋久兵衛板

町名、坂、橋、渡し等を記す、刊年なし、幕末のものらしい。

## 武江遊覽志略　一冊　小形横本

龍尾園尋香撰　安政六年序　書肆不記

正月元日より十二月大晦日まで日々の社寺祭忌行事其他物見遊山の場所を列記す、卷頭に彩色景書五葉あり、何人か好事家の個人出板ならん。

## 御府内八十八ヶ所道知るべ　天地人三冊　小本

光明講中編　二代目廣重畫　慶應二年板

江戸市中とその周圍の眞言宗大師巡り八十八ヶ寺の本尊と寺境を圖し、これと同じ番號の四國納經所の詠歌を記して相對照せしめた講中發願の冊子。

## 御府内八十八ヶ所道知るべ　天地人三冊　小本

願主　大和屋孝助、三河屋利兵衛編　喜齋立祥畫

慶應二年　江戸講元　松屋文吉

別項と同種の別本である、本欄に江戸内外八十八ヶ所の所在本尊を記しまた寺觀を書き、上欄に寺の略緣起と四國靈場の同番札所を記してある、本書は出板して幡ヶ谷莊嚴寺に奉納したもの。



## 東京名勝圖會　上下二冊　中本

岡部啓五郎撰　大澤南谷畫

明治十年　東京　丸家善七出板

江戸に新東京が現出した頃の名所圖會である、銀座にまだ馬車鐵道すら敷設されぬ前の記である、驛遞局にて郵便といふものを説明し、國立銀行にて金融制度を敎え、新橋停車場にて汽車開通の光景を叙し銀座にて西洋煉瓦造りの妙を賞して居る、珍とする書は宮城内吹上御苑の描景であらう。（名古屋村野時哉君惠贈）

## 東京町鑑　一冊　小形横本

條野傳平編

明治七年　東京　日報社發兌

東京各町名と當時の六大區々長及び各小區の戸長名を記す。

## 東京地理沿革志　四六判本　洋裝假綴一冊

村田峰治郎編

明治二十九年　東京　稲垣常三郎發行

東京市内外における古來地形の變更、新地、町區變更、町名改正その他の沿革を比較的細かに説述す、本書一名「東京字典」といふ。

## 町名沿革調　洋裝 假綴 一冊　菊 判 本

東京市區整理局編　發行年不記

東京の都市計畫による土地區劃整理施行區域にある十五區内の町名沿革を調査したもの、この書により徳川初期からの變遷が知れる。

## 江戸城物かたり　和製假綴活字本一冊　中 本

昭和四年　東京　日比谷圖書館發行

「江戸城の大奥」山中笑「江戸城殿舍の建築と甲良家」大熊喜邦「受賣の大奥ばなし」三田村鳶魚の三講演集で口繪に江戸城の三圖を載す。（大阪今井寬一君惠贈）

## 銀　座　洋 裝 一 冊　四 六 判 本

大正十年　東京銀座　資生堂編並發行



慶長六年徳川時代の貨幣制度の施設を此地に肇めた昔から明治の初期の東京唯一の煉瓦通りとなつたとき、更にその以後の變遷や、街衢のこと、店舗のことや風俗氣分などと東京諸家の隨筆隨感を集錄し、口繪に多數の錦繪縮摹、寫眞、町圖等を載す、記事中に明治十五年榿盆子著銀座小志（原著木板）一編を凸版にて現はすのは珍である、此書資生堂の改築記念として發行されたのであるが此冊子にある總てはその後更に大震災により全く失はれて居る。（大阪船越政一郎君惠贈）

## 街衢暗記 空おほへ　一 卷　新燕石十種第一收錄

菅 園 撰　年號不記

江戸大傳馬町の町內記で地理沿革、風俗、名物、商店、祭禮の盛況等を見聞のまゝに記す、菅園なる人知れざるも自序に十軒店又は大傳馬町へ通勤云々とあれば町家の通番頭のやうだ。

## 下 谷 通 志　一 卷　新燕石十種第四收錄

山崎美成撰　年號不記

下谷區內の地理沿革名所由來を考證するに一々古書名を擧げてその出典を明かにしてある、著述年號なけれども著者は文久三年に歿した、多分老年の作であらう。

## 下谷上野　洋装一冊　四六判本

久保田金僊編

昭和四年　東京　松阪屋發行

上野廣小路の松阪屋の新築が出來た、その記念出板で諸文士の上野界隈についての見聞感想を集錄し又口繪には昔の彩色景書數葉を挿む。（大阪船越政一郎惠贈）

## 觀音示現 淺草名靈抄　一冊　中本

樂只軒主人撰　淺草寺中惠頭坊忠然閲

寛政三年　江戸　桑村半藏々板

淺草觀音出現の緣起を記し更に本堂の繪馬、境内諸堂の所在由緒に及ぶ。

## 淺草繁昌記　洋装假綴一冊　菊判本

松山傳十郎編

明治四十三年　東京　實力社發行

東京の中でも榮枯盛衰の激しい觀樂境嬉遊巷を有する地區案内記である、大震火にてその跡方なくなつ



た方面の寫眞が參考になる。

## 後樂園史　洋装假綴一冊　菊判本

田村剛著

昭和四年　東京　刀江書院發行

小石川の後樂園が水戸藩祖頼房の創營から漸次擴張され變形され今日に至つた沿革、園内諸景の配置を現狀の寫眞を挿入して説明してある。

## 本所雨やどり　一巻　新燕石十種第五收錄

加藤敬豊撰　享保十八年序

本所の名所舊跡を順覽してその由來から現狀を記してある、就中隅田川の考證に主力を注いである。

## 江戸大焼明細記　板本寫本合綴一冊　中本

本書は江戸書肆某が蒐集合綴した一冊である、表紙に江戸大火年表を貼り、本文には慶長見聞集に載せる慶長六年大火を初め明暦以後幕末までの大火記錄の抜萃や覺書や詞藻を含み、中には往々京都長崎の

火事の記もある、其内明和九年目黒行人坂火事一種、文化八年市谷火事一種、弘化三年本郷火事二種の讀賣瓦版は珍らしく、又佐藤一齋自筆の防火邸詞（詩稿）の黜删なども合綴されて居る。

## 明曆以後大火記　　寫本一册　中本

明曆三年、明和九年、文化三年の江戸大火記錄を集めた册子である。

## 御江戸大地震大破　　一册　中本

安政二年　江戸　要石堂施板

安政大地震の早摺板で各方面の損害を記し「並に出火類燒場等書上」の寫しあり。

## 吉原戀の道引　　一册　大本

菱川師宣書

延寶六年　江戸通油町　本問屋開板

この書地誌の分類に屬すべきではないが、この册子に載する淺草見付、山谷堀、淺草觀音境內、日本堤から吉原廓內外等の光景が精しく描寫され、當時この方面の情景風俗がよく現はれて居り且本書が稀本の部に屬するので一標本として登錄する、この繪本に師宣の署名はないがその筆に成ること紛らうべくもないやうだ。

## 北女閭起原　　寫本　四卷　四册　大本

庄司又右衛門撰　享保五年記

洞房語園の一名にて少しばかり異同はある。

## 日本製品圖說淺草海苔　　一册　中本

高鋭一撰

明治十年　內務省發行

勸業殖產の方針をもつて內務省が日本製產品を內外に知らしめんと企圖した「製品圖說」の第一として東京名產の隨一を紹介發表した書である、美麗なる彩色畫にて海苔採收の施設から其成分、製造法など多數を挿みこれに說明を施した一册。

## 埋木花　　寫本十冊　大本

平 一貞編　文政九年自序

一種の墓誌集である、江戸及び其周圍に散在する變り種や世に廣く知れさるを拾ひ集め、古塚、古碑、俗傳碑、古址標、板碑などを列記して或はその傳をなし或は俗説を語り、中には考證めきた記もあり、古寺の緣起もあり、いづれも碑の形狀や實境の見取書や碑面の文字などを記す。墓誌に關する書冊數々あれどその引用書目に本書を取るものは見ないやうである、編者一貞の何人なるやは未勘であるが本書も餘り流布せざるものか。



# 安房國の部

## 房陽郡鄉考　　一冊　中本

烏海醉車撰　嘉永三年序　書肆名不記

地誌目錄本篇に載せた「南總郡鄉考」と姉妹篇で各郡の彩色圖と村邑の領主村高を記し終に朱印社寺の領高を列記す。

## 千葉縣古事志　　寫本 五卷 二冊　中本

嶺田楓江撰　年號不記

この書は明治初期に各府縣がその管下の地誌を編制するとき著者よりその資料として縣廳に差出したものであらう、自序によれは管下の古跡古事を採訪し今安房國の部を了りたれはこれを縣令船越閣下に呈すとあり、船越衛が千葉縣令たりしは明治十三年より同十六年までなればその年間の編纂である、書冊の內容は安房の建置から郡村の名義を述べ更に古社寺、墳墓、人物、古蹟等を記す。

## 安房名勝地誌　洋裝 假綴 一冊　四六 判 本

關谷寫性、鳥海金隄合輯
明治三十年　北條町　鳥海書房發行

まだ汽車は開通しない頃東京館山間の沿岸を汽船で旅客が往來する頃の房州名勝案内記である。（大阪船越政一郎君惠贈）



# 上總國の部

## 千葉縣君津郡々誌　洋裝 上下 二冊　菊 判 本

昭和二年　君津郡敎育會編並發行

上總の内で東京灣に面して居るのはこの郡である、木更津町を中心とし中央部に鹿野山の靈地景勝がある、此地には鎌倉時代から江戸時代にかけて常にその覊府と密接の交渉があつた、本書上冊は此郡の地方史、下冊は現勢、社寺、名勝、風俗、人物傳を記す。

## 山武郡鄕土誌　洋 裝 一 冊　菊 判 本

大正五年　山武郡敎育會編並發行

東金町を中心とする郡で郡誌と町村誌との二編より成る。

## 夷隅郡誌　洋 裝 一 冊　菊 判 本

大正十二年　夷隅郡役所編並發行

勝浦町を中心として太平洋に沿せる地方の郡誌で沿革現勢を記す。

**吉田川神社 瀧口大明神社傳記** 寫本 一冊 大本

鈴木近江編 明治二年記

夷隅郡部原の惣鎮守は日本武尊を祀る、その由緒及び祭禮行事等を記す。

**上總一宮名所誌** 洋裝 假綴 一冊 菊判本

林 壽祐編並發行

一宮町を中心として上總東海岸地方の名所を紹介す。（在一宮著者惠贈）



## 下總國の部

**下總國郡鄉考** 一冊 皇典講究所講演收錄

村岡良弼撰 明治廿六年稿

上總と安房にはそれ〴〵古人の郡鄉考が著はされて居るが、下總にはそれがなかつた、著者これが攻究を遂げて雜誌「皇典講究所講演」に連載した、その三冊合綴である。

**鴻臺覽古** 稿本 一冊 中本

闕 先民撰 文政五年序

内題には「下總國府臺志料」とある、鎌倉大草紙以下史譚軍記等を引いて國府臺を中心とする地方の治亂を叙し、終りに附近の社寺の記がある。

**遊勝鹿之記** 寫本 一冊 大本

太田南畝撰 明和四年記

明和四年九月蜀山人はその友人三四と國府臺に遊び、附近の國分寺、眞間寺に詣し、行德に出て舟で歸つたことがある、漢文を以て作つたその紀行と作詩が本書である、尙勝鹿行の後四日彼は武州府中に趣き同じく國分寺六所明神に至り玉川を見物した紀行と詩とがこれに添えてある。

## 史蹟名勝天然記念物調査　六輯　六冊　菊判本

大正十四年―昭和四年　千葉縣編並發行

第一、二輯には多くの史蹟と天然記念物、第三輯には名木、第四、五、六輯には古墳と天然記念物の調査を收錄す。

## 千葉縣千葉郡誌　洋裝一冊　菊判本

大正十五年　千葉郡敎育會編並發行

今の千葉市を中心としてその一帶地方の郡誌である、この郡には豪族千葉氏の遺蹟が澤山にある。

## 千葉誌　洋裝一冊　菊判本

明治四十四年　千葉町編並發行



今の市がまだ町時代の編著である、千葉の地理沿革を叙し又名所舊蹟を語り終りにその地方の文献や特種の事蹟人物等を附錄として載す。

## 千葉繁昌記　洋裝假綴一冊　菊判本

明治廿四年　千葉町君塚辰之助編並發行

## 千葉縣海上郡誌　洋裝一冊　菊判本

大正六年　海上郡敎育會編並發行

利根川の川尻から九十九里濱の海岸に亘る郡で銚子、犬吠、旭町等を含む、この地方今日では千葉縣の寶庫となつて居る、本書この郡の沿革、社寺、名蹟、人物墓碑、習慣等多くの事項を細記してある。

## 匝瑳郡誌　洋裝一冊　菊判本

大正十年　匝瑳郡敎育會編並發行

下總の東部太平洋に面する郡にて八日市場町を中心とする地方の地誌で郡誌と町村誌よりなつて居る。

## 千葉縣香取郡誌　　洋裝一冊　菊判本

大正十三年　香取郡役所編並發行

此郡には香取神宮があり、別格官幣社小御門神社があり、龍正院の古刹があり、伊能忠敬といふ偉人を佐原から出して居る、本書一般沿革現勢の外に神社、寺院、舊蹟、名勝、墳墓、城主、人物の各誌を以て相當詳細の記がある。

## 香取參詣記　　一冊　中本

文政十一年板　著者板元不記

香取神宮參詣の案内記で二三の景書を挿む、多分神宮で發行したものであらう。

## 成田繁昌記　　洋裝假綴一冊　中本

川井景一撰

明治十年　成田　大塚源左衛門外二店發賣

これは案内記でなく、當時流行の繁昌記を漢文調の假名交り文で記したもの。



## 佐倉誌　　和裝活字本一冊　中本

林　壽祐撰

大正十三年　房總鄉土研究會發行

佐倉風土記の如く舊領内一般に至らず主として今の佐倉町とその接近町村の沿革人物、社寺舊蹟を記す。

（千葉縣林壽祐君惠贈）

## 古河志　　寫本　三卷　三冊　中本

小出重固撰　文政十一年頃稿

現在の古河町は下總猿島郡に所在して茨城縣の管下にある、幕府時代の藩主土井侯の領地は下總にて葛飾猿島二郡の内、下野にて都賀寒川二郡と安蘇郡の內、武藏にて埼玉郡の內にあつて、三國六郡に跨つて居た、從つてこの地誌もまた三ヶ國六郡に及んで居るが城市の所在によつて下總國の部に編入する。本書は多く上卷二冊（古河城市の分）中卷一冊（武藏埼玉郡と下總葛飾郡の分）下卷二冊（下野領內の分）の五冊本として傳へらるが現本上下各二冊を合綴し三冊本となつてる、著者は初め江戸詰藩士であつたが後に國詰となりそれから本書を編述したのである、本書著作年月を記せさるも卷尾に「右者文政

七八年の草案なり浄書に及はざる程同十年亥十月四日云々」とあるから十年が十一年頃完稿したのであらう、本書の解説につき古河町小杉徳君の教を受けた。

## 古河概觀

洋装 假綴 一冊　中形 横本

昭和三年　關東タイムス社編並發行

巻初に町の概況とその八景とを記し大部分のページは小杉乃帆流氏の古河史談を載せその中に歴史と名勝故蹟を紹介してある。(古河町小杉徳君惠贈)

## 野田觀桃記

洋装活寫本一冊　小本

宮本鴨北撰

明治廿八年　野田町　茂木啓三郎發行

醬油龜甲萬の醸造元が鄕土宣傳として出板頒布した小冊子である、江戸川に沿する徑圍一帯が夭々たる桃林であつた時代の觀桃記である、ストライキで有名になつた今の野田の町にはこんなノンビリした光景は窺はれない。



## 印旛沼開疏論

洋装 假綴 一冊　菊判本

野口勝一著

明治二十六年　東京　金原明善社發行

印旛沼を撿見川に通じて放水し以て汎濫の害を除くとともに周圍に良田を開發すべしといふが論旨である。

# 常陸國の部

## 常陸紀行　乾坤 二巻 四冊　大本

黒崎貞鄕撰

文政九年自序　大阪　秋田屋太右衛門板

この書常陸紀行といふも著者は常陸人にして單に常北を繞りて筆記するものである、主として久慈那阿二郡のことを述べ時に他郡に及び又隣國下野那須方面に亘るところもある、この間に史を語り沿革を叙し鄉黨を顧み社寺名木に說き及ぶ、常識ある學者の言のやうだ。

## 常陸國舊跡誌　寫本 一冊　小本

著者年代不記

水戸太田の故城につき慶長以前の略歴を叙しその他多數の古社寺、山川につき極めて簡單の記述をする、いづれも那珂久慈二郡の外に出てない。



## 鹿島日記　一冊　大本

高田與清撰

文政五年序　江戸　耕文堂刊

江戸を出發して千住、我孫子、龍ヶ崎、佐原を通つて香取鹿島に詣し、引返して銚子、成田、船橋を經て歸るまでの紀行である、途中國史の講義、歌の會、古蹟探杖などをなす、刀根川畔神崎の神社內にあるナンジヤモンジヤの大樹は年經たる桂の木なりけりとある、又今の潮來は水戸西山公の改字にて常陸風土記にある板來なりとてその地名文字の沿革を說いたところもある。

## 飛多知積さ　寫本 一冊　中本

著者不明　慶應元年記

下總境武藏國松伏に住む僧形らしき人が筑波山に參詣の傍ら常陸國中を旅行するの記であるが、その前年に武田耕雲齋等の暴動から各地に慘劇を起して兵火、刑死、戰死等の名殘や噂で悽慘の氣が到るところに現出してることを物語つて居る、尙この書中には當時原形を存した磯町郊外の反射爐の書がある。

## 常北遊記　　一冊　中本

青山季卿撰
明治二年　水戶　鉄槍齋藏板

「大八洲遊記」の著者青山鉄槍が安政二年九月多賀郡の北端磯原にある祖先の墓に展し歸途常北の山嶽名勝を賞して歸る漢文の遊記である、此行家に歸れば江戶の大地震にて「師友藤田東湖亦罹災爲之悵然自失者久矣」で結んで居る、附錄として此行の此時の名勝賦詩を載す。

## 新篇 潮來圖誌　　洋裝　假綴　一冊　菊判本

井口菴二峰原著　不爭軒柳垣補訂
明治四十五年　土浦常南通信社發行

地誌目錄本篇に載せた「潮來圖誌」に補訂を施し名所の說明や地方の史談、維新人物傳を加へてある。

## 安寺持方記　　寫本　一冊　中本

岡野　從記　享和三年稿



久慈郡の山奥で磐城と境を接するところに安寺持方といふ武陵桃源の部落がある「安寺持方種もらひ」と唱へらるゝほどにその部落と世間とは沒交涉であつた、著者はその部落が治領の一部であるために巡回した記である。

一村文字を知らず、年貢納の如き一の符牒を以て之を記帳して居る、本書に天明二年の聲帳といふのがある、各戶の年貢納め覺書である、判じ物の書のやうである、それで嘗て誤算がなかつたといふ。

## 常陸國太田文　　一　卷　　續群書類從雜部收錄

前部が散佚してない、郡別に庄又は小村の反別を載せてあるが領家を記さぬ、僅に社領のみ二三見える終りに「右弘安二年（一二七九年）作田惣勘文大略注進如件」とある。

## 常陸風土記物語　　洋　裝　一　冊　　四六判本

松岡靜雄撰
昭和三年　東京　刀江書院發行

古語と傳說から風土記を解說して居る、先づ前記において常陸國の範圍や統治者氏族を稽へ、本文にて

は風土記中にある開拓、統治、神、池と井、耀會等を分類してこれを古語傳説から説明を下してある、終りに附錄として風土記原文に難訓難語の解釋を下してゐる。

### 水戸中寺社書　寫本一冊　大本

安永七年記

水戸領內の寺院神社の本末、宗派、受領、除地高を記し、所々に有名なる開基僧の略傳を付す。

### 吉田神社考　稿本一冊　大本

小宮山昌秀撰　年號不記

水戸下市にある式內社にて日本武尊を祀る古社の記である、本書は水戸の學者小宮山楓軒が古文書により鎭座時代第三宮、名神、神位、社領其他を考證したもので、著者の自筆本、立原任藏印がある、起稿の年號なきもその晩年天保年中のものであらう。

### 稻敷郡志　洋裝一冊　四六判本

野口如月編



大正五年　龍ヶ崎　いばらき新聞社出張所發行

龍ヶ崎江戸崎等霞ヶ浦西岸地方の町村志である。

### 新治郡案內　洋裝　假綴　一冊　四六判本

大正二年　新治郡協贊會編並發行

### 北相馬郡志　一冊　四六判本

野口如月編

大正七年　龍ヶ崎北相馬郡志刊行會發行

取手町相馬町など郡內町村別に沿革現狀地理を記す。

### 眞壁郡案內　洋裝　假綴　一冊　四六判本

大正九年　眞壁郡物產共進會協贊會編並發行

# 東山道總國の部

## 奧陽日錄　　寫本一冊　　大本

中山廷冲撰　　明和九年稿

書家高陽山人の名ある著者は明和九年二月、神田田所町の寓居を燒出されて東北旅行を思ひ立、仙台に止宿して松島に遊び平泉を見物し、更に奧羽の境を越えて山形から立石寺に詣し、最上川の急流を舟にて下り酒田に上陸し羽後の象瀉に至り書家の見地からその奇景を激賞して居る、汐入の口狭くこの勝景も終に埋まるを恐ると記してあるが象瀉の勝は埋まる前に文化九年六月の大地震で湖底隆起して天下の勝景一日の内に平地になつて仕舞つた、著者はこゝから引返して再び仙台に來り長く滯留して蒙古碑を奇賞したり詩書談したりし秋の末に江戸に歸つた。

本書當時の傳寫と見えその題簽の文字は高陽山人の筆蹟である、この頃は門弟に筆寫させて題簽だけを記念のため著者の自記することは少くなかつた、本書もその一冊であらう。



## 奧羽美知野志於里　　寫本一冊　　大本

古川古松軒撰　　寛政七年記

幕府に仕へた著者が致仕して故山備中に歸臥する砌りの紀念と見えてその序文に「僕二たび貴き御方の御いつくしみ淺からず世に難有事に思ひしも古郷にかへるに及び」云々とあつて「奧羽道のしほりと題し拙き筆恥かしみも顧ず平井尊君の玉机のもとに呈し侍るならし」とある貴き方といふのは松平樂翁公か或は寛政元年蝦夷まで隨行した巡撿使某のことかで平井といふはその大官の近昵者であらう、記するところは白河關の書から奧羽の景書とその簡單な說明である、大部分は「東遊雜記」に載するものと大差はない、卷の最終に著者が古郷の草廬の書に添え「くれ〳〵も御別れいぶせく老かすみなれしむくらの宿を圖し一首を奉り侍りぬ、人とはば我のちならん今日別れあすは軒端の松をしるしに」とある。

## 木曾の山ふみ　　寫本一冊　　大本

著者不明　　享保十三年稿

享保十三年七月京都を發し近江路より木曾街道を江戸に入る紀行である、本書冒頭に「若かりし時より旅を好みて西に東にへめぐりしかば東海道の往來も既に廿三度にのぼると覺えし」云々とある、この人

國史歌學の心得ある人と見え史に徴し歌話を引きて名所を說く就中諏訪にて「風の祝」の故事物語りを所の人に探るなど造詣のあるところを窺ふことが出來る、且この道中を駕籠にて通ずるを見れば相當位置ある人にて輕井澤にて「大阪番士の交代柘植氏に行あふたがひに駕をとゞめて時をうつす」とあれば矢張德川直參の上士のやうで麻布に邸宅を持つて居た。

國書解題、內務省地誌目錄にも本書を載するが同じく著者名がない。

## 中仙道記　寫本一冊　中本

著者年代不明

大津から東都まで各驛の里程と附近名所を記し、殆んど各驛每に一二首の自詠を記す、文章簡潔にて益軒の道之記を讀むやうである、何人か相當の學者の記と思はれる。

## 東北遊日記　上下二冊　中本

吉田松陰撰　松下村塾藏板

慶應四年　大阪　河內屋吉兵衞刊

嘉永四年十二月十四日櫻田の藩邸に一詩を留めて同志と共に奥羽地方を巡遊し佐渡にも渡つた時の漢文紀行である。

旅行記といへ慷慨淋漓の氣が溢れて居る、江戶亡命の詩の終りに「縱爲一時負、報國尙堪爲」とある、始め十二月十五日發足の約なりしも一日繰上げ「赤城義士遂事之日」に決行したのである。

## 北　枕　稿本上中下三冊　大本

長澤赤水撰　天保四年稿

天保四年は東北地方の饑饉年であつた、越後長岡藩では奥羽諸藩の情況を調査すべく秘密視察吏を派出した、著者と外一人は身を商人に扮して出發し先づ新潟に至り新發田を經て諏訪峠を越えて會津、白川棚倉、三春、二本松、福島、米澤、山形、天童、新庄、鶴岡ノ諸藩城下と領內を視察し鼠ヶ關を經て歸國する旅行記である、其間饑民の慘狀、米なき旅宿、藩廳の財政窮亡等を視察して居るが中に或藩では餓孚途に橫はる間に上士の者ども綺羅を飾つて行列を立て行ものあるなどを赤裸々に記してある。

本書は著者の稿本と見えて卷末に諸家自筆の跋文を載せてある、著者の家は代々かくの如き隱密の用を勤むるものと見え赤水の子赤城もまた維新の頃乃父と同一任務に服してゐた、而して赤城は終に長岡より脫走して會津に籠城しそこに戰死した。

## 日本アルプス湖沼の研究　洋裝一冊　菊判本

田中阿歌麿撰

昭和五年　信濃北安曇郡教育會發行

寫眞入一千ページの大冊である、日本アルプス連山脉の間にある多數の湖沼につき專門的調査を遂げた實驗的研究である。



# 近江國の部

## 淡海錄　寫本十二卷十五冊　大本

原田藏六撰　元祿三年稿

「淡海錄」のことは地誌目錄本編に載せた、更にその後も類本數種を管見した、しかしいずれも完本でなかつた、漸く大阪の舊家殿村平右衛門氏の藏本を借り得て之を筆寫し、更に後また著者の後裔に當る大津市在住原田金之祐君の藏本と對校するの機會を得て始めて原本の形を模することが出來た、これにより坊間流布の「淡海錄」が如何に變改されまた省略されたかの來由を知るを得た、原著は相當の冊數であるが詩歌、古文苑其他冗文が多いので後年の本は多くこれを削除したのである、又原著には彩色畵を多數に挿入してあるが後年の本にはこれも多くは除いてある。

本書原名を「淡海錄」と稱するも一に「淡海地志」ともいひ又「淡海府志」ともいふ、卷初には「淡海地志」序として元祿元年の漢文自序を載せ、次に「淡海錄」自叙賦駢麗厥詞といふがあるこれは元祿三年になつて居る、又次に元祿壬申（五年）釣雪子の序文を擧げ卷末には元祿七年の和文跋をなし且自家

の略譜を記し終に

元祿十年丑雪月令辰

原田加助曾孫俗名　原田傳兵衛種存（略譜には云藏六）

としてある。

各卷の惣目錄は（一）海陸記（近江概況、八景、彥根十景其他文藝記事多し）（二）山川水石記（三）舊都並武將付古今御城記（四）古戰塲記（五）近州村高記（六）給取及湖船記（七）海陸行程、土產記（八）日吉、同佛閣、同山記（九）長等、同與廢記（十）竹生島、石山記（十一）神社記、佛閣付年中行事記（十二）遺事雜錄より成る、原田本も同一目錄であるが半紙本にて何故か二十五卷十二册としてある。

## 淡海木間攫

寫本十二册　中本

塩野義陳撰　寬政四年田中信精序

本書は十二支十二册本になつて居る、著者は彥根藩士にて一時御鷹餌割奉行といふに就任して領內所々を巡回する職にあつた、これ著者が國內地志編纂の素志を達するに頗る好都合であつたので一國十二郡の庄園、村落、社寺、名所古蹟、人物、故實、名產、靈藥等を調査すべく着手したのであるが、全部完成に至らず、漸く彥根藩領とその附近即ち犬山、阪田、愛知、神崎、淺井、伊香等東北六郡の記をなしたのである、近江の古地誌として全部ではないが「輿地志略」に次で詳細である。

## 滋賀縣史

洋裝　六卷　六册　菊判本

昭和三年　滋賀縣編並發行

本書は三浦周行博士監修牧野信之助氏編纂主任となつて編成したもので府縣史中最も要を得て居るとの定評がある、第一卷概說、第二、三卷上代より近世まで、第四卷最近世、第五卷參照史料、第六卷附圖とし多くの國寶、圖書、古文書等を本文の間に點綴してある、由來滋賀縣は天智天皇の時滋賀の都であり、同平安朝以來天台宗の根本道塲であり、戰國時代には武將、近世には江州商人で多くの傑物を輩出し、同時に一千年の帝都と隣接するだけに地方史として最重要の位置にある。

## 滋賀縣下 輦道略記

一　帖　中形折本

著者板元年號共に不記

本冊には著作者出板年月を記さゞるも明治十一年明治天皇北陸行幸の御道筋を記するもので著作は多分滋賀縣廳であらうと思はれる、本冊紙幅を上下二段に區別し、下段に縣下の御道筋、宿驛、附近名所を記し、上段に宿驛その他の沿革略記を載せてある、又當時の御休泊所の位置は別に符號がつけてある、此外に草津から鈴鹿まで參宮街道も載せてあるがこの道は神宮御參拜の豫定が變更されたので實は御通過がなかつた、尙また滋賀縣を經て北陸行幸のことは北陸道の部に收錄する「陸路廼記」が別にある。

## 淡海廿四勝圖記　上下二冊　白紙中本

安國佩石道人撰書

明治廿五年　北邨四郎兵衛發行

琵琶湖を探勝して廿四景を撰びその南宗書に漢文の圖誌を序した白唐紙刷の本で諸詩客の讃朱圈點付で附記してある。

## 横川記　寫本一冊　大本

叡山横川にある楞嚴院以下諸堂の記、佛像古文書、高僧遺文等總て南北朝時代までのものを記す、原本は定めて由緒ある古書と思はれる。

## 長等の櫻　和裝活字本一冊　菊判本

西川太治郎撰　昭和二年自家出板

西は志賀宮址の邊から東は粟津の兼平塚まで大津を中心としたところの名蹟や人物やを集め其景書、肖像、遺墨雜多の寫眞を自ら撮影して作つた一冊である、又長等の櫻が今度史蹟に加へられたので一層櫻樹植培を奬勵すべく如上の記に櫻に關するものを多く加へ著者の胸裡には大津一帶の湖岸を櫻の樂天地に化せんとの希望がひらめいて居る、此書御大禮記念として作られ知友に配布したのである。（大津市中村紅雨君惠贈）



## 近江神崎郡志稿　洋裝二冊　菊判本

大橋金造編

昭和三年　神崎郡敎育會發行

郡出身の著者が敎育會の依囑を受けて編纂したものでその印刷將に成らんとするとき著者は物故して後世に紀念を遺した、本書は上卷に古代、庄園、中世武家、近世領主、制度、產業の六志を載せ、下卷に

神社、寺院、教育、人物、地理、町村、交通、名勝舊蹟、雜の九志を收めてある、神崎郡は八日市を中心とし蒲生郡に隣接する細長い小郡であるが上古朝鮮人移住の地で今も朝鮮人街道の名を殘す往還がある。

## 近江愛智郡志　洋裝五冊　菊判本

昭和四年　愛智郡教育會編並發行

本書は阪田、蒲生、栗太の諸郡志を編纂した中川泉三君主任となつて編述したのである、第一、二卷を以て古代から現代までの沿革史を叙し第三卷に地理、經濟、人物等を、第四卷に神社と文筆、第五卷に寺院佛堂を記す、この郡は愛知川町を中心とし遠く東は伊勢國境に擴がる郡でその大部分が山間なるため飛鳥奈良朝からその後までの史料意外に多く現存し就中永源寺の文書には足利時代の史料文學の頗る饒多なることを著者は特記して居る。

## 東淺井郡志　洋裝四冊　菊判本

黒田惟信撰

昭和二年　東淺井郡教育會發行

滋賀縣の各郡はいづれも郡志編纂に大なる努力を竭して居る、この郡志もまた代表的の一である、當郡



は北の伊香郡南の阪田郡の間に介在し虎姫を中心とする江北の一地方で、古來北陸の歴史的事蹟がある、本書は卽ち上古以後の沿革に殆んど全力をあげ、その收集する資料古文書は近江一國の歴史を展開したる如く豊富である。本書四冊の內最初の二冊半は沿革史、半冊は現代志、災異志、人物志、詞藻志より成り最後の一冊は資料古文書を蒐錄してある。

## 有史以前の近江 史蹟調查報告書第一　洋裝假綴一冊　四六倍判本

昭和三年　滋賀縣保勝會編並發行

滋賀縣史蹟調查報告の第一冊として發行されたもので主として縣內にて發見された石土器、銅鐸の調查とその圖版であるが、中に江州人の名著たる「雲根志」著者木內石亭とその石器研究に關する記や銅鐸製作の寫眞說明とは讀者の目をひくに足る。

## 大津京址の研究 史蹟調查報告第二　洋裝假綴一冊　四六倍判本

肥後和男編

昭和四年　滋賀縣保勝會發行

滋賀縣史蹟調査報告の第二冊で肥後調査委員の調査報告である、卽ち主として天智天皇の宮居大津京の位置を測定すべく天皇の開剏された崇福寺梵釋寺の址を尋ねこれが發掘の結果前者は滋賀里の西方山中に多數の礎石とその遺品を得略ぼ伽藍の配置を確めた、又後者は南滋賀の南方にその遺址と推定さるゝ土壇瓦石を發掘した、この二寺より推測して大津京は南滋賀の台地にして梵釋寺の附近であると結論してある。

此書多數の圖版を付し殊に崇福寺と推定梵釋寺との遺址は發掘の結果により明に窺ふことが出來る。

## 彥根山由來記　和裝活字本一冊　菊判本

中村不能齋編

明治四十三年　東京　中村勝麿發行

彥根山は慶長九年佐和山城移轉前より存在すと古代の歷史より築城のことに及び、明治の初期城郭取壞しの命ありし時恰も明治天皇の駐輦あり御思召を以て保存され終に再び井伊家の所有となりし次第を記す、卷末に城櫓の覺書（文化文政頃の記）を載す。



## 大津市三十年史　洋裝　假綴一冊　四六　判本

中村五十一郎編

昭和三年　大津　湖國社發行

市制施行以後三十年間大津市の發展を各方面から叙述したもの。（編者惠贈）

## 近江名木誌　洋裝　假綴　一冊　菊判本

大正二年　滋賀縣編並發行

口碑傳説にある名木と胸高周圍十尺以上の現存大樹を列記した冊子である、名木の中には坂本日吉神社御茶園に傳敎大師の將來したといふ一千年以上の茶樹、愛智郡押立村に周圍九尺の花の木、坂田郡春照村に樹齡三百年高三間の南天其他を擧げてある。

# 美濃國の部

## 濃飛兩國通史　洋裝 上下 二冊　菊判本

阿部榮之助撰

大正十二—三年　岐阜縣教育會發行

上古より戰國時代までを上卷に、豊臣時代より現代までを下卷に收めて濃飛二國の制度沿革を詳細に記する中に多くの資料古文書記錄を博く採收し莊保園田制社寺宗教の興替をも詳記し著者が歴史專攻の本領を發揮してある、著者は惠那郡中學校長である。

## 濃州釜谷之眞圖　稿本一冊　中本

小田切春江撰並書　天保七年序

内務省の「天然記念物及名勝調査報告」第七輯に三好學博士の報告として岐阜縣揖斐郡本郷村大字藤代字霞間ヶ谷の櫻の一章がある、霞間ヶ谷は池田山の一角にて山下櫻樹のあるところまでは池野驛（養老鐵道）から約十町車馬を通ず、櫻の並木は山麓に至る路傍の兩側に立ち七八町の間にある、樹種は悉く



美麗なる山櫻で若葉の色彩が時々變化を呈するに賞嘆を値す、それから溪流に架する小梁を渡り山麓の斜面まで來ると滿目櫻樹ならざるはなくその樹種は山櫻の外に彼岸櫻と枝垂櫻とか交り目通し幹圍四五尺を超ゆる大木がある、コヽの櫻樹は明治十四年以降補植したのが多いが古來尾濃地方での櫻の名所となつて居る。

著者は「尾張名所圖會」の畫家である、彼若きときこの地に遊んで眞景を寫生したのが本書である、第一圖は墨書の全景圖であるが第二圖以下は彩色の密書で合計十景を描寫してその餘白に記事を入れてある、歌月菴小田切忠近圖と終りに題す、この寫生書と内務省報告書の寫眞を對照するによくその實を寫してある。

現本は出板の板下本と見え題字序跋文等にそれ〲著者の押印を見る、本文中霞間ヶ谷の文字を用ゐるも題箋には釜谷としてある。

## 岐阜市史　洋裝一冊　菊判本

中島俊司編

昭和三年　岐阜市役所發行

前編は上古以降の歴史を史學的見地を以て極めて通俗に記述しその間に資料を加へてこれを立證し、後編は現代市勢を明かにすると共に風俗、社寺、名蹟等を敍し市の沿革概略を簡明に而かも興味を以て編纂してある。（著者惠贈）

**岐阜みやげ**　一　冊　中　本

長瀬寛二撰

明治二十三年　岐阜市玉成堂發賣

岐阜の案內記で彩色入景畫を挿む、木板刷りで綺麗に仕上げた冊子である。（大阪船越政一郎君惠贈）

**長良川鵜飼の記**　洋裝　假綴　一冊　四六　判本

昭和三年　岐阜市役所編並發行

長良川鵜飼の來歷を記したもの。

**養老郡志**　洋　裝　一冊

大正十四年　岐阜縣地方改良協會養老支部編並發行



養老瀧に關する資料と木曾川沿岸に尾藩領側で堤防を高くするため洪水時に災厄を蒙ることの甚しかつた此地方の文書が本書によつて參考とすることが多い。

**養老名所案內**　和　裝　活　字　本　中　本

佐藤愛之助撰

明治廿九年　美濃高田町　田中正兵衛發行

養老瀧とその附近の案內記で卷中詩歌を加へた木板刷りの景畫數葉を收む。

**美濃國多渡山圖**　大形　折本

安政三年書圖

養老瀧を湧出する一帶の山脈、東は伊勢境に接し西は關原の高原に達して居る、その山容を描寫しその間に村落社寺を點出した鳥瞰圖である。

**不破郡史**　洋裝　上下二冊　菊　判　本

大正十五年—昭和二年　不破郡教育會編並發行

古代の不破關、近世の關原戰場を有し中山道の咽喉で古來史上の事蹟に富む地方である、上冊は上代より江戸期までの歴史で多くの資料や珍らしき圖版を挿入してある、下冊は明治以後の發達を少しく記し大部分は神社志、寺院志、人物傳、災害、地理、民俗、雜錄等を載す。

## 不破名勝誌

梅溪　光編

大正二年　關ヶ原　廣瀨與市、三輪善四郎發行　洋裝　假綴　一冊　菊　判　本

關原の戰場、不破關址及び附近の古蹟名勝案内記である。

## 武儀郡古蹟名勝誌

大正五年　武儀郡敎育會編並發行　洋　裝　一　冊　菊　判　本

美濃町を中心として刀工繁榮の地たる關町其他郡内町村の社寺、城址、古塚、名木、人物等を記す。

## 山縣郡志

大正七年　山縣郡敎育會編並發行　洋　裝　一　冊　菊　判　本



岐阜市の長良川對岸で鵜飼舟の根據地たる長良村から細長く北に擴がり高富町を中心とする地方の郡志である、本書は郡の沿革郡勢を極めて簡略にし主として社寺、城砦址、名所舊跡、天然記念物、古墳、遺物、金石文、古文書を載せ地誌としての參考資料が多い。

## 揖斐郡志

大正十三年　揖斐郡敎育會編並發行　洋　裝　一　冊　菊　判　本

美濃國は戰國時代に東海の諸英雄が京師に入りて覇を唱へんとする要衝に當るため地方志として緊要の位置にある、本書には地方現存の古文書を引照してその叙述に力むるところが多い。

## 美濃國加茂郡誌

大正十年　加茂郡役所編並發行　洋　裝　一　冊　菊　判　本

この郡は東濃に屬し太田町を中心とする山間地方で沿革及び郡勢を記す。

## 惠那郡史

大正十五年　惠那郡敎育會編並發行　洋　裝　一　冊　菊　判　本

東濃北部の一郡で中津川、大井町を有し又岩村の遠山藩があつた木曾川に沿つた方面の沿革史。

**美濃小島瑞巖寺志**　洋裝 假綴 一冊　菊 判 本

鷲尾順敬撰

大正十年　小島村瑞巖寺發行

南北朝時代後光巖院が一時頓宮を置かれたところで二條基良の「小島のすさび」の主要地である、こゝの瑞巖寺は領主土岐賴康が開基したのである、本書附錄として「小島のすさび」を添ゆ。

**岐阜縣史蹟名勝天然記念物調査報告**　洋裝假綴二冊　菊判本

大正十四年—昭和三年　岐阜縣内務部編並發行

第一冊を缺き第二、三冊である、第二には景行天皇泳行宮址、反正天皇養老遺蹟、不破關を初め舊館城、古墳、廢寺址、化石産地等、第三には古墳、城址、窯址、老樹等を載す。（東京堀田健男君惠贈）



## 飛彈國の部

**大野益田吉城三郡沿革**　寫本一冊　大本

富田禮彥撰　明治九年稿

大野益田吉城の三郡は卽ち以て飛彈一國を成す、本書は高山縣廢せられて一國が筑摩縣に隸屬された頃その縣廳に差出した三郡各別の沿革史で上代より明治九年に至る主たる變遷を編年体に記したものである、著者は「斐太後風土記」の著者である。

**飛彈國中案内**　洋裝一冊　菊判本

上村滿義撰　延享三年自序

大正六年　高山町　住伊書店發行

鄕土研究者岡村利平氏が校訂發行した飛彈叢書第六編の單行本である、この新版本は内閣文庫の著者原本を底本とし他書を參考として比校の上刊行したのである、その内容は地誌目錄本書に載する「飛彈國

案内記」と同一で多少の増減あるに過ぎぬ、校訂者が刊行辭の中に高山の桐山家藏本には内閣本になき滿義の延享三年正月の自序を載せあり是れ吉城郡河合村の柏木本と同一系本にて二本共に高山の地役人今井一雄が嘉永年中に書寫せし趣の識語「去る人の秘藏せしを乞得て寫取」云々と記す（柏木本には著者の序を缺く）されどこの本の底本となつた古寫本（卽ち今井本）むかし高山に傳はりしならむか今はその存否を知り難しといふて居る、然るに僕は此記事を見て再び家藏本を披いて見るとそれが正しく今井一雄の自寫本でその押印があるのみならず、卷初に題言と題書とがあり且柏木本にないといふ原著者の序文も載つて居る。

## 飛彈國鄕村帳　　寫本一冊　　小本

著者年代不明

三郡各鄕の石高、鄕内の村名を記した德川初期の古寫本である。

## 岐阜縣飛彈國 大野郡史　　洋裝三冊　　菊判本

大正十四年　　田中貞太郎編並發行



大野郡の事業として編纂された郡史である、上卷は上代から金森藩時代まで、中卷は德川直轄時代、下卷は明治時代に分冊されて居る、大野郡は飛彈の政廳たる高山町のあるところだからこの郡の歷史は卽ち飛彈一國の歷史と稱して可なりだ、本書は編年史体に編制され引照廣汎に亘つて詳細を悉してるが惜むらくは冊子の浩瀚なるに拘らず索引の用意なく又詳しき目次を缺くために繙讀不便の嫌ひがある。

## 岐阜縣益田郡誌　　洋裝一冊　　菊判本

大正五年　　益田郡役所編並發行

岐阜から高山に通ずる街道の中途にある勝景中山七里やその沿道の上呂、下呂、小坂、萩原等の町々は皆な益田川に沿ふてこの郡内にある、本書は沿革、郡勢諸項、社寺、舊蹟、風俗、傳說、故事、人物系譜の別を以て概略的に網羅してある。

## 飛彈之旅　　和裝活字本一冊　　小本

一火會同人記　　昭和二年記

大阪鐵商の連中が長良川に鵜飼した翌日下呂温泉に憩み更に高山に行き富山に出た時の紀行文である、高山には僕も三回に入りその二回は矢張り富山に出たことがある。（大阪津田勝五郎君惠贈）

# 信濃國の部

## 信濃記　　寫本本編九卷附錄三卷拾冊　小大本

鷲山宗賢撰　　文化十二年序

現本は著者の稿本か或はその子孫の筆寫かである、第一卷神社、第二卷佛閣（缺）第三卷御城、第四卷古城、第五卷名所古跡、第六卷山川温泉、第七卷物產、第八、九卷村高にして附錄としては木曾松本諸城拔書一冊、仁科家系、松本來歷一冊著者宗賢（本姓林氏）系圖一冊より成る、內務省地誌目錄に載する「信濃記」一冊とは別本のやうである。

## 千曲之眞砂　　寫本　十卷　五冊　大本

瀨下敬忠撰　　寶曆三年記

地誌目錄本編に活字本をもつて登錄したがその後ヽ古き良寫本を得た、目次本文等を見るに別に差異はないやうだが卷末に瀨下敬忠五十六歲書之とありヽ又敬忠が著書目錄の列記されてあるなど原者によつて筆寫したらしく思はれるからこれを重錄す。



## 信濃奇談　　上下二冊　大本

堀內元凱撰

文政十二年序　　希月舍藏板

高遠藩の醫官中村元恒の子堀內元凱が父の話說を聞つヽ筆錄したもので信州の天地生物につき特異の件件を載す。元凱二十三歲にして早世したので父元恒その息のために紀念出板として刊行したのである。

## 上信日記　　寫本　上下　二冊　大本

淸水濱臣撰　　文政二年稿

文政二年閏四月一日江戶を發して中山道を武州兒玉郡の金鑽神社に詣で妙義山に登り人の探らぬ東峯の奇勝を賞し、更に碓氷嶺を越えて信州に入り上田松代の二城市を過ぎ川中島の古戰塲を吊し善光寺に賽し戶隱山に參詣し歸路に就く紀行である、中に高井郡仁禮村にてこの國の地誌「千曲の眞砂」を閱讀しこれ信州第一の地誌なりと嘆稱して居る、歸路には草津温泉に浴して長歌を咏じ、榛名山に上りて古鐘銘を記錄しそれから高崎に出で上州三古碑を見て古色を愛賞して居る。

## 信州城主得替記　寫本上中下合一冊　大本

著者年代不明

信州十郡の城砦陣屋の領主來歴を足利季世より始めて細小の家士の分にも及んで居る、編述の年代不明なれども記事は元文年間を最終とすればその頃の作であらう。

## 諏訪史料叢書　和裝活字本七卷七冊　中本

大正十四年―昭和二年　諏訪史料叢書刊行會發行

この叢書收錄するところは最初四卷は諏訪神社の神事次第舊記、祭典古式、上下兩社神事大略、大明神繪詞、御本地緣起、祭祀再興次第、其他神社關係諸記錄等にて第五、六卷は別項に載する「奉令集」第七卷は水戸浪士通信、和田嶺樋橋合戰記錄等である。（東京柳田國男君惠贈）

## 奉令集　十卷二冊　諏訪史料叢書

松澤義章撰　嘉永安政頃の記

奉令集と稱するは諏訪人たる著者が藩の家老千野氏の知遇を受けて本書を編纂したからである、國史記錄、軍記、雜書等をひろく跋涉して諏訪に關する史料を採集しこれを編年史躰に作つたもので上古より延寶三年に及んで居る、中に古文書の採訪にその特色を發揮し著者の史眼高きを示して居る。



## 諏訪八勝詩　一冊　中本

吉田靈凰撰

天保十四年　江戸　岡田屋嘉七板

諏訪湖沿岸の八勝景を一張每に圖し他の一張にその詩賦を題したもの、著者は高島藩の儒者。

## 諏訪明神誌　洋裝 假綴一冊　四六 判本

山田肇撰

大正十五年　南信日日新聞社發行

本書は諏訪神社誌、神事祭禮誌、鎭坐神誌、上下二宮分立誌の四篇より成る、卷末に諏訪案內記を附す。

（諏訪三澤勝衛君惠贈）

## 諏訪史第一卷　洋裝一冊　四六倍判本

大正十三年　信濃敎育會諏訪支部發行

諏訪兩郡の教育會では諏訪の地理歴史につき時代を劃して斯界の專門學者に囑托しその著述を集成し諏訪史をなすの計畫を樹てた、而してその第一卷は先史時代として郡內の石器及び古墳時代遺蹟は鳥居龍藏博士により著作され精巧なる圖版と詳密の說明を載せてある、第二卷は宮地博士の諏訪神社に關する分研究を發行する豫定になつて居る。

## 更科日記　一冊　大本

賢順僧都撰　安政五年記

木曾福島の願行寺住僧が姨捨山に田毎の月を賞せんと善光寺に詣で目的の地では雨に降られた仲秋無月の恨を殘してかへる紀行、姨捨山の墨畫一張あり、門人の出板本らしく書肆名がない。

## 姨捨山考　和裝活字本一冊　四六判本

佐藤　寬撰

明治廿八年　東京　萬卷堂出版部發行

姨捨山といふは實は更級山又は冠着山のことなりとて諸書を引用し、今觀月台のあるところは更級山の尾八幡村の丘にて登攀に便利で追々後世に稱景の名題となつた田毎の月にも相當するところから八幡村



武水別神社の別當神宮寺住職が更に放光院長樂寺といふ支院をこゝに設け滿月殿など造りて參詣者を招致する計をしたのがもとゝなり觀月の姨捨山といひなしたのである、しかし眞の姨捨山はその上の山である、現在よりこれをいへば篠井線鐵道の姨捨驛の下に觀月台があつて姨捨山は線路から上の方の高山であるといふのである。

## 松本六萬石史料　洋裝　假綴　一冊　菊判本

飯塚源次郎編並發行　明治三十六年

松本藩領の諸制度とその城市の沿革を記してある、本書上中下三冊ものらしきも現本は上卷沿革を叙するまでにて以下二冊刊行されしや否や未調。

## 伊那郡鄉村舊事記　寫本四卷合一冊　大本

關　盛胤編　元文五年自序

この書「伊那郡鄉村記」を基として新舊の見聞を加へたことがその序文中に述べてある、本文は先づ信濃の概說から伊那郡のことに及びその建置沿革を述べ以下各鄉村を記するに莊別によつて居る、「鄉村

記」は六卷より成るがこの記は第四卷までにて卷序を追ふも後の下條莊と遠山莊がない、矢張り全六卷本となるべきものであらう、地理の記述において「鄉村記」とやゝ異り詳細の實見が交へてある。

## 南信伊那史料　和裝活字本二冊　中本

佐野重直撰並發行　明治三十四年

上下伊那郡の變遷、名勝古跡、人物奇談、方言、社寺、地誌等を記す。

## 飯田細釋記　寫本一冊　大本

森　壽副撰　享保十三年稿

飯田城下の由來、領主の交替、堀氏歷代から町内の沿革、その改造、制度、町家諸職の免許運上のことを記す。

## 飯田撮要　寫本一冊　大本

著者年號不記

別項の「飯田細釋記」と大同小異である主として町方諸商の貢租、特權その制度のことなどを記す。



## 飯田雜記　寫本一冊　大本

著者年號不記

飯田領内の特色ある名物や物產、植物等の由來やその性能を說明したもので風變りの隨筆である。

## 伊那の中路　景本一冊校訂活字本一冊　中本

菅江眞澄撰　柳田國男校訂

天明三年稿　昭和四年　東京三元社發行

天涯の流寓客で特に東北地方民家の風俗や地理を究めて多數の紀行文を遺した菅江眞澄の遊覽記で本刊行は民俗傳說の研究者たる柳田國男君を中心とする同志の間に實行されつゝある、本書はその第一冊で著者がまだ白井秀雄とて原籍の姓名を署する壯年時の作で故鄉の三河を永久に後にして信州に這入つた最初の紀行である。

## わがこゝろ　景本一冊校訂活字本一冊　中本

菅江眞澄撰　柳田國男校訂

本書は秋田佐竹侯爵の明德館本を影寫した一冊と校訂者の頭註を添えた活字本一冊とより成る。

天明三年稿　昭和四年　東京三元社發行

「伊那の中路」に續く紀行にて更級の姨捨山の月を見んと出掛けた時の記である。

## 來目路の橋　景本一冊校訂活字本一冊　中本

菅江眞澄撰　柳田國男校訂

天明四年稿　昭和四年　東京三元社發行

天明四年初秋更級を立ちて善光寺戸隱山、それから田澤湖畔を消遙し信越國境を遊覽した紀行である。

## 木曾山記　寫本一冊　中本

著者不明　弘化二年記

木曾山林の由來、木材種類其他林伐、林政に關することを記す。（大阪淺井義暆君惠贈）

## 木曾山林誌　寫本一冊　大本

深井　寛撰　明治九年稿

序文の末に地理寮九等出仕深井寛とあつて官廳の命を受けて記述した由を記す、木曾彊域のことから山林經營の沿革を叙し現在立木、伐木年度割を擧げ驛宿、物產、風俗、材價、諸物價などを記してある。



## 小縣郡史　洋裝二冊　菊判本

大正十二年　小縣郡役所編並發行

小縣郡は國分寺の所在今の上田町を中心とする一帶の地で德川時代前には信濃の中樞勢力であつた、本書は本篇と餘篇と二冊より成り地貌、統治以下產業交通その他の各篇皆な夫々古代から現時までの沿革變遷を叙說してある。

## 北佐久郡志　洋裝一冊　菊判本

大正四年　北佐久郡役所編並發行

小諸、岩村田等の市邑を有し此に淺間山あり、中央に信越鐵道の貫通する地方の誌で地理、歷史、人物町村の四篇に分類され、就中沿革古蹟を詳述してゐる。

## 更級郡誌　洋裝一冊　菊判本

大正三年　更級郡役所編並發行

信州の中央部に位し信濃建置と同じ頃の古名ある郡で今日は篠井を中心として居る、本書この地方の古蹟人物を詳述す。

**埴科郡志**　洋装一冊　菊判本

明治四十三年　埴科郡役所編並發行

松代屋代等の市邑を含む沿犀川地方の郡志で村上眞田兩氏の世譜や地理人物志を適宜に配置してある。

**東筑摩郡誌**　洋装一冊　菊判本

大正八年　信濃教育會東筑摩郡會編並發行

松本市を中心として犀川流域の南北に長き一帶の地方で本書には主として現勢を記す。

**西筑摩郡誌**　洋装一冊　菊判本

大正四年　西筑摩郡編並發行

所謂木曾路の地方誌で木曾編年史木曾人物志の如き相當詳細の記述がある。

**南安曇郡誌**　洋装一冊　菊判本

大正十二年　南安曇郡役所編、同教育會發行

松本市を起點として西と北に擴かる日本アルプス連山を有する山嶽郡である、大古から犀川流域には固有の文化と歴史がある、山嶽部には近世的地質生物の研究がある、本書は圖版寫眞を數多挿入し諸項に専門家の指導を受け周到なる注意を以て編纂されて居る。



**上水内郡誌**　洋装　假綴一冊　四六倍判本

明治四十一年　上水内郡役所編並發行

長野市を東方に抱く山間部の郡で本書は專ら郡勢を記す。（東京福山壽久君惠贈）

**下水内郡誌**　洋装　假綴　一冊　四六倍判本

大正二年　下水内郡教育會編並發行

長野縣最北の郡で飯山町が中心になつて居る、本書は主として郡の歴史沿革史蹟等を記す。（東京福山壽久君惠贈）

**上高井郡誌**　洋装一冊　菊判本

大正三年　上高井郡教育會編並發行

長野驛を中心とする信越線から東方に上州と交境する方面にある郡で須坂町を郡衙地とした川中島一郡

のことを記す。（東京福山壽久君惠贈）

## 下高井郡誌　洋裝一冊　菊判本

大正十一年　下高井郡役所編並發行

長野縣最東北部で中野町を中心として平穏温泉集落のある地方誌である。

## 史蹟名勝天然記念物調査報告　洋裝假綴十一冊　菊判本

大正十二－昭和五年　長野縣編並發行

## 上高地天然記念物調査報告　洋裝假綴一冊　四六倍判本

昭和三年　内務省編並發行

上高地の植物、同溪谷、附近山岳植物生態、上高地盆地及附近地質鑛物等につき專問著者の調査報告とその圖版を載す。（東京三好學博士惠贈）

## 菅平に關する地理的事情　洋裝假綴一冊。菊判本

三澤勝衛著



昭和三年　上田商工會議所發行

小縣郡長村における高原地の地理的調査に關する講演筆記を印刷したもの。（上諏訪三澤勝衛君惠贈）

# 上野國の部

## 上野國志　　寫本三冊　　大本

毛呂義卿撰　安永三年自序

本書は明治四十三年の洋裝活字本を以て地誌目錄本編に登錄しておいたがその後三冊の傳寫本を得た內容に差したる變りはないと思ふ、現本は內題に國志とあるも題簽は國誌としてある。

## 群馬縣史　　洋裝四冊　　菊判本

昭和二年　群馬縣敎育會並發行

本書の編纂は堀田璋左右氏主としてこれに當つた、大正十二年殆んど完稿したのを震災のため燒失し再度起草したのである、四冊の內前三冊を地方史とし後一冊を維新後における諸般の沿革史としてある、第一冊には上代から建國以後の歷史、郡鄕の名義、王朝の地方制度とその時代の治亂、鎌倉以降室町時代の國內諸族の興廢存亡を載せ其內新田足利兩氏につき最も精しい、第二冊は德川時代諸藩及國內に治所を有する旗元等の歷代事蹟、第三冊は德川時代の土地貢租、交通、敎育其他の事蹟、第四冊は現勢史を叙述してある、群馬縣は上代からの上國であるが古文書その他文献的資料の他に比して乏しい點もあるかも知れぬが有名なる三古碑を初め古跡古跡の多いところであるから今少し說明の資料たる寫眞圖版を加へて本書の特色たる叙說と相待つて編纂されたならば完璧を得たらうと思はれて遺憾に堪えない。



## 群馬の史蹟名勝　　洋裝一冊　　四六判本

柴田常惠　高橋城司共撰

昭和三年　東京　三明社發行

上野一國の史蹟名勝を交通系統に區別してこれを案內記流に說明したもので大小の寫眞版を多數收錄してある。

## 群馬縣史蹟名勝天然記念物調査報告　　第一輯　　菊判本

群馬縣史蹟名勝天然記念物調査會編

昭和四年　東京　三明社發行

瀧澤石器時代遺蹟、二子山及その附近古墳、三古碑、國分寺址、妙義山等につき說明と多くの圖版を集錄す。

## 高崎市史　洋装 上下 二冊　菊 判 本

昭和二年　高崎市役所編並發行

市史と稱するも簡單なる城市の沿革を記しこの大部分は市の現勢を統計と共に叙述したもので編述の方法も亂雜の嫌がある。

## 尾曳之跡　洋装 假綴 一冊　四六 判本

高橋坤二撰

大正十二年　館林町　秋元文華堂發行

尾曳とは館林城の別名である、足利時代にその開發者赤井但馬守照康によりて助けられた狐が報恩のために尾を曳いて城の繩張をしたといふ傳說からその名がある、德川時代には譜代大名か親藩かを以てここに封じた由緒の城邑である、本書はこの城市と神社佛刹勝地を記し併せて敎育風俗を叙してある。

## 沼田分限帳　寫本 一冊　中 本

著者年記なし



沼田か眞田氏の所領であつた時代の宿老以下輕卒に至るまでの分限帳である、年代を記さゞるも家士姓名によつてほゞその年代を窺ふことが出來ると思ふが未だ深く勘へない、沼田の眞田氏は天和元年を以て終つて居るから本書の原本はその以前に書かれたものであらう。

## 沼田昔物語　寫本 天地 二冊　中 本

著者年記なし

足利中期以後沼田が沼田氏によりて領せられ後には關東の北條と越後の上杉との接衝地點であつた、當時における同氏の盛衰內訌より終に眞田氏がこれを領有するまでの昔語りを叙した書である。

## 沼田記　寫本上中下三冊　中 本

著者年記なし

上卷沼田や赤城山の靈地靈場の由來や昔譚を集め中卷下卷に沼田とその一族が滅亡に至る諸記を掲ぐ。

## 安中志　和装活字本三卷合一冊　大 本

板倉勝明撰　嘉永年間記

明治三十年　中島芳雄校正　松風軒藏板

甘雨亭叢書の著者で安中城主たる板倉侯がその領內を記する地誌である、內容は各村別にその村名と神社佛寺山川產物を一つ書きに簡明に記してある、この書序跋なく著作年記もないが書中に天保二年の文字があり且板倉侯は安政四年に卒去したからこの書は多分天保末年から嘉永年間の作であらう。

## 群馬縣邑樂郡誌　洋裝一冊　菊判本

大正六年　邑樂郡敎育會編並發行

館林町を中心とする郡で利根川に沿する上州の平坦部地方である、前編に郡勢を記し後篇に町村誌を叙す、口繪の中に館林古城圖が二枚挿加さる。

## 群馬縣北甘樂郡史　洋裝一冊　菊判本

本多龜三編

昭和三年　東京市外瀧の川町三光出版社發行

上州製糸の濫觴ともいふべき富岡町や一宮貫前神社を有する地方の郡誌で各町村別の記述がしてある。



## 群馬縣吾妻郡誌　洋裝一冊　菊判本

昭和四年　吾妻郡敎育會編並發行

草津、四萬を初め上州溫泉群湧地帶の郡誌で山間風俗の趣味が現はれて居る

## 毛山探勝錄　上下二冊　中本

野口常共(伯辰)撰　明治十四年　同人發行

明治十四年內閣書記官として大隈參議の史室にあつた著者が伊香保、四萬、澤渡、草津等の溫泉場を漫遊した時の詩集である。

## 上州伊香保溫泉名所舊跡　一冊　小本

萬亭應賀編

明治十五年　東京　長谷川忠兵衛板元

極めて通俗な草紙風の繪入案內記である、繪本の人物は散髮とチョン髷とが半々になつて居る。

## 上州草津溫泉名所舊跡　一冊　小本

萬亭應賀編國利書

明治十五年　東京　長谷川忠兵衛板元

是も別項伊香保温泉名所舊跡と同一趣向の案内記である。

### 磯部鑛泉繁昌記　　一　冊　　小　本

山本有所編

明治十九年　磯部　福音堂板

磯部が信越鐵道の開通により温泉地として東京人に知られた初期の案内記である。

### 總社町郷土誌　　洋　装　一　冊　　菊　判　本

明治四十三年　總社町役塲編並發行

前橋の郊外上越鐵道線に接し汽車の窓から古墳の見える邊が上古上毛野の國府の所在地と稱せられて居る、本書はこの地方の町勢一般と史蹟勝地を説いた地方誌である。

### 群馬縣勢多郡神社誌　　洋装假綴　一　冊　　菊　判　本

大正五年　群馬縣神職會勢多郡支部編並發行



## 下野國の部

### 日光巡拜圖誌　　寫本四冊　　大　本

獨笑庵立義撰　　文政元年稿

地誌目錄本篇に載せた「川越松山遊覽圖誌」と同一著者の作である、この人關東地方の地理に通じ、また多くの參考書を讀渉したと思はれる、友人數輩と江戸を發して日光に參拜し附近の勝景を賞しつゝ中禪寺にも上り、歸路は鹿沼より岐れて出流山、太平山、岩船山等の靈場を巡詣して居る、記事頗る詳密であるのみならず彩畫を以て道途の光景は素より德川時代には公には書にされなかつた日光二廟の宻書を撮り、又書として珍らしき出流山、岩船山の札所の景趣も現はしてある、就中日光の行事たる延年舞强飯節會の寫生の如き珍品と思はれる。

### 日光山道しるべ　　一　冊　　小形横本

鷹橋義武撰　　菊岡沿涼書

享保十三年　日光鷹橋治郎左衛門板

同一人の著「日光山名跡誌地誌」(目錄本篇揭出)より抜萃した日光山の略案内記である。(大阪船越政一郎君惠贈)

## 日光道中繪圖　寫本四帖　小形折本

長坂安直寫　文政九年書

江戸城の大手から日光神橋まで地圖と見取圖によつて街道の兩側を寫したもので沿道の道路、山川、並木、寺社の形狀を書き城邑社寺名、名所などを細記す、その帙裏に左の記あり。

從東都至日光之行程文政中依臺命正謬誤爲全圖四卷摹寫以藏之　丙戌三月　長坂安直

## 浴那須温泉記　稿本一冊　大本

酒井喜熙撰　弘化四年稿

水戸の藩士が那須温泉に入湯する旅行記である那須では大丸、辨天、板室其他の温泉に遊び更に足を延はして光圀黄門が入浴賞讃したたといふ棚倉の東山奥湯岐温泉まで遊び白河城下をも見物して歸路には太田に出で黄門の隱棲地西山を拜して歸郷するのである。

この記道途の案内を詳述しまた多くの寫生畫を挿入してある、那須の山麓高久村の旅舍覺右衞門方にては芭蕉の筆蹟を見てそれを影寫して居る、かの「奥の細道」にある「あらたふと青葉若葉の日の光」の句をその最初の吟たる「あらたふと木の下闇し日の光」で載せて居る、その他卷中に心越禪師の那須山温泉八景や人見卜幽軒の温泉記の刊本を綴込である。



## 野州那須温泉由來記　一冊　中本

人見綱爲編並發行　年號不記

温泉の開基、殺生石、喰初佛、温泉の旅館、養生書などを記す、往昔の温泉場發賣の小冊子である。(大阪本山彥一君惠贈)

## 塩原繁昌記　一冊　小本

錦石秋撰

明治十九年　塩原　君島玄一發行

有名なる三島縣令(通庸)が縣民の反對を排して大に土木を起し大道路を那須の荒蕪地に通した時代の温泉記である、今日では東那須に三島縣令の表德記念碑が立つて居る、この時代から今の福渡戸より古町門前までの間温泉場として頗る賑つた、當時の旅籠料は一體に十二錢より廿五錢までとある。

## 塩原温泉紀行　一冊　小本

並木學軒著　明治廿二年自家出板

漢文の紀行と墨畫を添、例の文墨餘技である。

## 塩原温泉誌　洋装假綴一冊　菊三切本

大正八年八版　塩原　田代近三編

## 那須郡誌　洋装假綴一冊　菊判本

大正十三年　那須郡敎育會編並發行

各町村記、沿革、領主人物傳、城址、社寺、名蹟、古墳墓等を網羅し、この郡の地誌としては簡略ながら備つて居る。

## 増補那須鄕土誌　洋装假綴一冊　菊判本

渡邊金助撰

大正六年　大田原町　金林堂發行



那須郡一圓の地誌で所々に著者の脫線した所見を挿む。

## 下野神社沿革誌　和装活字本八卷八冊　中本

明治三十六年　風山廣雄編並發行

下野國各郡の町村沿革とその現狀概要を記し、其所に鎭座する大小各神社を無格社まで社歷、祭神、祝祭、社殿等を記し、毎卷附錄に重なる神職の略傳を載す。

## 二荒山神社　洋装假綴一冊　四六倍判本

大正六年　日光　二荒神社々務所編並發行

日光の地勢名勝からはじめ本社の由來、祭神、社歷、社領、寶物、祭祀等頗る詳細に叙す。

## 栃木縣誌　洋装一冊　菊判本

田代黒瀧撰

昭和二年　宇都宮市　下野史談會發行

現勢一般を叙外して史蹟名勝の説明を主とした縣誌である。

## 足利市史

洋裝上下二冊　菊判本

昭和三四年　足利市役所編並發行

歴史的大人物と大豪族の發生地であるから、これを中心に幾多の事件と事物が轉回して居る加ふるに足利學校や鑁阿寺の舊蹟があつて文化史上宗教史上に多くの効績と資料とを殘して居る、更にまた現代では特種産業の中心地であるから古往今來市史として記載すべき事柄は頗る多端である。毎冊千二三百ページになる上下二冊の市史が出現したのも蓋し偶然ではない。

## 足利學校遺蹟沿革

洋裝假綴一冊　菊判本

明治四十二年　足利學校遺蹟圖書館編並發行

篇中現存の古書冊の說明が載つて居る。

## 足尾銅山の栞

洋裝假綴一冊　四六判本

大正二年　足尾町　横田八百吉發行



## 栃木縣における　主要史蹟名勝天然記念物概要

洋裝假綴一冊　菊判本

昭和四年　栃木縣編並發行

縣內の主なる史蹟名勝及び天然記念物四十六件を撰んでこれが圖版と共に調査考證の要旨を郡別に記したもの。

# 磐城岩代の部

## 日本名蹟誌 磐城岩代之部　　洋裝六卷 五冊　　菊判本

渡邊市太郎編

明治三十九年　　宇都宮光彰館發行

日本名蹟誌第十二編にて福島縣の部である、先づ兩國の總説を叙し次に各郡別に總説、沿革、名邑、名所、舊蹟、故人小傳、寺社等に項を分けて略述し、各郡の終りに寺社の景觀を銅板印刷にて多數掲載してある、この銅版が編者の本領である。(名古屋村野時哉君惠贈)

## 仙道記　　寫本一冊　　大本

編者不明　　元和年間記

德川時代における陸奥の内今の福島縣に屬する部分は東部即ち今の常磐線に沿する方を海道といひ東北本線地方を山道と稱し、會津六郡は別になつて居た、本書の仙道は卽ち山道で、この方面が一時德川幕府の直轄であつた時代に所在各城の天正時代における隆替を古老の里正から覺書にして徵したことがある、その時の答書を集錄したのが本書である。

## 東白川郡沿革誌　　和裝活字本二冊　　中本

井上光一撰

大正十三年　　白川町　　堀川古楓堂發行

著者は幕末における棚倉町の遺老である、本書には上古よりの沿革を叙し維新の際佐幕派であつた棚倉藩の顚末を語り、更に後の郡政情況を記し卷末に名勝社寺を載す。

## 東白河郡史　　洋裝一冊　　菊判本

大正八年　　東白河郡役所編並發行

東白河郡は常磐線にも東北本線にも惠まれざる山間の一郡で棚倉町を中心として居る、記事は主として明治以後の沿革にあつて、別項「東白河郡沿革誌」の後を受けたものと見られる。

## 福島縣伊達郡誌　　洋裝一冊　　菊判本

大正十二年　　伊達郡役所編並發行

福島市から東方一帶に擴がる郡で川俣、掛田、保原など蠶業と絹織物との生産地あり、福島縣下の富裕地と稱せられて居る、本書は前半に郡の沿革を叙し後半に主として郡勢一班を記す。

### 刈田郡誌　洋装一冊　菊判本

昭和三年　刈田郡教育會編並發行

この郡は宮城縣に屬する磐城の一部である、德川時代に仙臺の藩老片倉氏の居城白石を中心として居る、本書はその歷史、地理、名蹟、古文書等に重きをおいて編纂してある。

### 福島縣名勝誌　洋装假綴一冊　小本

守田兜阜編

明治三十六年　福島市　是一堂發行



## 三陸と陸前の部

### 陸奥郡鄕考　上下二卷　仙臺叢書第十一卷收錄

關元龍撰　文政七年序

この書の陸奥は岩磐三陸の五ヶ國である、上卷に郡鄕、邑數、國府、鎭府を記し、下卷に式社、一の宮、諸國分寺、安國寺を考へ、以下奥六郡、河内五郡、葛西七郡、大崎五郡、會津四郡、津輕三郡を初め、諸公道、外藩たる相馬、南部蝦夷等を記す、總て古書に稽へて典據を示してある、著者は一關藩田村氏の儒官である。

### 封内風土記　和装活字本廿二卷五冊　四六判本

田村希文撰　明和九年（安永改元）記

明治二十六年　仙臺叢書出版協會發行

本書は著者が君命を奉じて寶曆十三年編著に着手し以後九年を費し三たび稿を改め明和壬辰正月八十一

歳のとき完稿した、この年十一月安永と改元された、是より前仙臺儒者佐久間洞巖に奥羽觀跡聞老誌の著がある、この書仙臺領以外廣く奥羽に及ぶがため勢ひ仙臺領の記事にも粗漫に失する點があつた、然るにこの風土記は封内に限りて詳密に考査するがために仙臺府城を初め管内二十四郡の郡邑を詳記し、更に各邑の下に社寺名蹟、土產、里邑戸數を記し、橋梁はこの延長幅員までを計上する、全書漢文の記である。

## 封内名蹟志　二十一卷　仙掃叢書第八卷收錄

佐藤信要撰　庄司惣七校訂　寛保元年自跋

仙臺領の名蹟を各郡別に記したまでゞある、著者は佐久間巖洞の「跡聞老誌」を基としてこれを實地に尋ね縣吏村長に問ふて舊蹟を明にした、而してこの稿を起さんとするに當り親しく巖洞に謀りてその志を告げたるに巖洞は欣然として自著の補正さるゝを喜んでこれが成稿を慫慂した、然るに信要が本書校閲中に巖洞は沒しその完稿を得たのはそれから十數年の後であつた、この書頗る詳密であるが記事と出典を明かにせず往々俗説を採用するところあつて徒らに繁雜の嫌がある。

原著はもと漢文であつたのを宮城郡原の町庄司惣七なる人嘉永四年に校訂して和文に改編した。



## 封内土產考　一　卷　仙臺叢書第三卷收錄

里見藤右衛門撰　寛政十年記

仙臺領内の鑛物、動植物、工業品、海產物等につき產地製法其他の來由を記す。

## 仙臺領古城書上　一　卷　仙臺叢書第四卷收錄

延寳年中仙臺藩より德川幕府に書上報告したものにて領内二十一郡にあつた五百三十六城を收む、城といふも多くは砦館址にてその所任、廣袤、居城主を郡村別に記す。

## 奥州國分寺緣起記　仙臺叢書第三卷收錄

龍寳寺梅國泰音撰　享保二年記

## 松島眺望集　上　下　二　卷　仙臺叢書第一卷收錄

大淀三千風撰　天和二年出板

日本行脚文集の著者が延寳の末年松島に悠遊し石卷金華山を見物した、その時の見聞を例の筆法と詩歌

發句を取交せにして天和二年に刊行した、卽ち本書である。

## 松島巡覽記　一　卷　仙臺叢書第二卷收錄

相原友直撰　安永七年自序

多く松島の堂塔、古碑、文書など探る、中に瑞巖寺の什寶「松島天台記」といふ古文書がある、瑞巖寺の前跡たる松島寺が天台宗であつたことを記するもので珍であると說く。

## 鹽竈巡覽記　一　卷　仙臺叢書第三卷收錄

相原友直撰　享保二年記

## 奧鹽地名集　一　卷　仙臺叢書第六卷收錄

著者不明　寛政四年記（本文の記事による）

鹽竈の地名を古稱に照し後の世に失はれぬやう書置くといふが主旨にて郡名の宮城は一宮所在といふとから山、川、澤、森、石、堤、神社、碑と項を分けてその所在、名稱、別名などを書きならべ終りに鹽釜を香津といふは多賀の國府の要津にて國府津の意味なりと記す。



## 仙臺領地名所和歌　一　冊　中　本

著者板元不明　正德四年板

仙臺領内名所の和歌と鹽松八景の和歌より成つて居る、詠歌の終りに漢文を以て冷泉爲綱に乞ふて爲綱と其門下の公卿に出題して歌を需めたと記してある、編者も板元も共に記名がない、シカシ本書の躰裁とその記文からすれば伊達藩主がその近臣の人が自刻本を作つたものらしい。

## 鹽　松　勝　譜　二　十　卷　仙臺叢書別集第四卷收錄

舟山萬年著　佐藤廣胖校訂　文政五年完稿

萬年の原著は漢文であつたのを廣胖が校訂且和譯したのである、鹽竈松島の一區劃を記するに二十卷の大冊をなし、これを活字版にして四百五十ページの叢書一冊をなして居るから松鹽の記誌として恐らく最大の著であらう、内容は鹽竈と松島を交互に記し、鹽竈の方は仙臺よりこゝに至る道途の名跡を記し、松島の方は左右兩路と島嶼の部あり、碑碣の部には多賀城碑以下の拓本を載せ文藝部には德川時代諸文豪の漢文遊記を掲ぐ。

## 塩松紀行　一冊　中本

釈古梁撰

文化六年　仙臺　伊勢屋半右衛門　江戸須原屋茂兵衛板

漢文の塩竈松島遊記に數葉の景書と松島遊觀詩二十數首を添ふ。

## 塩竈神社考　一卷　仙臺叢書第三卷收錄

遠藤信道撰　明治八年記

塩竈神社が國幣中社に昇格したときその來由を考へ記したもの、著者はその時の宮司であつた。

## 松島圖誌　一冊　中本

櫻田䈁年著　東澤書

文政四年原板　明治二十一年　仙臺　伊勢屋半右衛門再板

地誌目錄本篇に載せた文政四年の原板に山岡鐵舟の序文を加へて再刷したのである。（大阪船越政一郎君惠贈）



## 松島記行手鑑　寫本一冊　中本

作者年代不記

筆を二本松に起して過ぎゆく驛次村里の名を記し、その間の山川名跡社寺を細大となく載せその下に簡單の説明がしてある、記行は松島から里府に至り所謂蒙古碑の邊にて本の道に戻るとして擱筆、本文の中に元文年間の文字ありまた書寫は寛政九年とあるからその間の記述である。

## 名勝松島　洋裝一冊　四六判本

小島博著

昭和三年　仙臺　無一文館發賣

松島の海岸にある社寺、海中の島々につき新きし觀察に加へて景勝を紹介してある。（大阪大石泰藏君惠贈）

## 金華山小誌　和裝活字本一冊　四六判本

明治三十六年　田代善之助編並發行

寫生の水墨畫を挿んだ案内記である。

## 夢遊金華山之記　一　卷　仙臺叢書第三卷收錄

大槻磐水撰　文化九年記

金華山島に渡り島内を觀光するもので記事極めて精し。

## 金華山記行　一　卷　仙臺叢書第三卷收錄

藤原廣泰撰　嘉永四年記

この紀行仙臺を出て牡鹿郡渡波の宿を發するより始まり大金寺辨財天に詣するに終る。

## 北上川古今沿革調　一　卷　仙臺叢書第五卷收錄

宮城縣土木課調査　明治二十年前後

宮城縣隨一北上川の本支流の流域、治水洪水河床の變移、沿岸の土地開發、運輸、生産等を記す。

## 壺乃碑考　一　冊　中　本

松浦武四郎、阿倍弘共著



明治三年　東京　玉巖堂梓

壺碑卽ち仙臺附近にある今の多賀城碑は擬作であるといふ説は昔からあつた、著者も壺碑は青森縣野邊地と七戸の間なる坪村にあるべき筈で、千曳明神といふのがその名殘りであると諸書を引證して論斷して居る。

## 宮城縣古社寺取調書　寫本未成卷　大　本

年次不記

明治時代縣廳が管下各郡に命じてその所在古社寺の由緒及び現形圖を取調べしめた調書の集成である、稿本のまゝ入手したのであるためまだ整理裝訂するに至らぬ、恐らく十餘冊の和裝本となるであらう。

## 史蹟名勝天然記念物調査　洋裝假綴五冊　菊　判　本

大正十二年―昭和五年　宮城縣史蹟名勝天然記念物調査會編並發行

五冊の内で第三輯に多賀城址に關するもの（第四輯に壺の碑の項あり）養賢堂に關する文獻調査の二項が最も精密である。

## 柴田郡誌　洋装一冊　菊判本

大正十四年　柴田郡敎育會編並發行

東北本線鐵道によれば宮城縣に入ると最初の郡である、大河原町が郡衙所在地であつた、上中下三編より成り、上は郡史郡地理、中は町村誌、下は郡治總覽である。

## 宮城郡誌　洋装一冊　菊判本

昭和三年　宮城郡敎育會編並發行

名勝に塩釜、松島、古碑に多賀城、燕澤あり、その他仙臺の郊外名蹟を包む地方の地誌である。

## 志田郡沿革史　洋装一冊　菊判本

大正元年　志田郡役所編並發行

陸前の中央部に位し古川町を中心とする方面の郡誌で主として現勢を記す。

## 玉造郡誌　洋装一冊　菊判本

昭和四年　玉造郡敎員會編並發行



小牛田から東北本線を分岐して羽前新庄に達する温泉地帯卽ち岩出町を中心として鳴子鬼首温泉を有する方面の郡誌である。

# 陸中國の部

## 北奥路程記　寫本一冊　中本

漆戸茂樹並書　年號不記

南部領たる陸中と陸奥の東北部の市邑村落を巡回する道路、村名、社寺、舊館、墳墓、傳說等を記し且彩色ある分見圖を多數挿入す、本書には記名がないが南部叢書に收錄する本書に著者名があり且幕府の巡見使に說明のため作つたことが凡例に出て居る、著者は明治六年八十四歲で歿したといふがこの書は幕末にかゝれたものと見える。

## 邦內鄉村志　八　卷　南部叢書第叢書收錄

大巻秀詮撰　寬政九年稿

南部叢書の解題によれば本書はもと六卷であつたが後に「花城鄉村志」二卷を附載して八卷となつた、「花城鄉村志」は「和賀稗貫鄉村志」で松井道圓の著と傳へられてゐる、これを訂補し且漢文に改めたのであると、然るに地誌目錄本篇に載せた家藏の邦內鄉村志中の「花城鄉村志」には天保二年毛馬內次盈といふ人の奥書に「大巻秀詮多年これを志し縣勤の時は俚人の傳を以て點撿心勞をなす所に天明七年午秋巡撿使下向によつて廻村の役幸を得て點撿をなし岩手和糠部五郡閉伊郡を以て六卷をなし又和賀稗貫四卷を合せ十卷をなす寬政九年丁己秀詮自著筆して坌ふせしめ正に寶藏に上る是れ後世の土臺を坌ふるものといふべし云々」とある、本書は南部封內の地志として最も細說を遂げたものである。



## 邦內貢賦記　一　卷　南部叢書第五冊收錄

古澤康伯編　年號不記

一藩中の用度、家士給人の扶持を初め道法、在鄉の收納、各郡村における米其他產物の賦課法、禮物規定等を記してある、本書は古記の取調べを基礎としたもので、その制定は天和二、三年頃のものによつて居る。

## 平泉舊跡志　和裝活字本一冊　四六判本

相原友直撰　寶曆十年自䟦

明治二十八年　仙臺叢書出版協會發行

本書平泉の堂宇舊址を具體的に叙述する最初の書であらう、尤も堂宇のありし日の姿を記し舊址の來歷

を叙するに專ら「東鑑」に據るのみで他の文献に考據するところがないのは後の「平泉志」の如き資料豐富なるに比べて頗る物足らぬ感じがする、しかし著作年代の古いところに現狀を昔しに溯りて稽へ見る面白い點が多くある。延寳年間の記錄「仙臺領名所舊蹟」（地誌目錄本篇所載）に金色堂下三代の柩を開いたことが記しあるが本書にはまた「元祿十二年の頃堂の板敷汚損したるに依て其旨を國主に白し修補の時新に槨を作り棺をいれたりといふ」とある。

## 平泉雜記　五卷　南部叢書第三卷收錄

相原友直撰　年代不記

平泉舊蹟志の著者の平泉に闕する随筆である、舊蹟志に寳暦十年の自跋あるところよりすれば矢張その前後の著作と思はる、藤原氏の一族その他關係者の事蹟とこの附近の地理來歷を論じてある。

## 平泉雜記　寫本　五卷二冊　中本

相原友直撰　安永二年自序

別項南部叢書收錄本を採つたがその後に二冊の現寫本を得た、この本には「安永癸己中秋重陜之日七十一翁相原友直㆔畏甫書于岩井郡篠谷之幽居」云々と記する序文があるので著作の年號を知るを得た、この序文は叢書本に載つて居らぬ、又各卷の內容についても記載事項に多少の差異あり殊に四、五卷の項にそれが著しく目につく、現本には五卷の外に「拾遺」といふがある、その記事の或るものは叢書本の五卷の內に含まれ或るものは全く載つて居らぬ、同時に叢書本にあつて現本に省かれた項も見える。



## 眞澄遊覽記　十篇一冊　南部叢書第六冊

菅江眞澄撰　天明五年—寛政七年記

三河國に生れた著者は壯年北國に流寓して南羽三陸の地を巡ぐり遠く蝦夷にも渡りながら一度も故國に省せず旅行を續けて終に七十六才秋田で沒した、この人その旅行記を繪入でものし年毎にその幾冊を重ねた、このことは柳田國男君の「雪國の春」に詳しく出て居る。

南部叢書に收錄するのは遊覽記中の南部領に屬するもので（一）けふのせはのゝ（二）はしわの若葉（三）委波底廼夜㡳（四）牧の冬かれ（五）於久の宇良宇良（六）まきのあさ露（七）をふちのまき（八）奥の手風俗（九）遊遇濃多隱（十）十曲の湖等十篇である、總てが日記体になつて土地の風俗がよく知れる。

## 南部史要

洋装　一冊　菊判本

明治四十四年　菊地悟郎編並發行

南部氏は甲斐源氏の一族で巨摩郡南部郷を領したのでこれを稱した、藩祖光行奥州に封せられて移動なく廢藩まで七百年四十一代である、本書はその間代々の事蹟を記したものである、故原敬氏自ら發起し自費を投じて編纂せしめこれを同郷の人々に頒布したのである。

## 岩手縣案内

洋装　假綴　一冊　四六判本

岩手研究會編

大正二年　盛岡市　文明堂發行

縣下の舊蹟にして歷史あるものはこれを說きその名勝を紹介し山川、社寺、古城址につき地方を區劃して記述す。（盛岡太田孝太郎君惠贈）

## 盛岡案内記

洋装　假綴　一冊　菊判本截本

大正十五年　盛岡銀行編並發行



所掲の寫眞は格別の印書紙を多數挿入し記事にも通俗の案内記と異つた所がある、卷初に年中行事を置き卷末に年表と市政一班の表を付す、發行所盛岡銀行を主宰する人に鄉土研究に熱心なる太田孝太郎君がある、多分同君の餘技として發行せられたものであらう。（盛岡太田孝太郎君惠贈）

## 和賀郡誌

洋装　一冊　四六判本

大正八年　和賀郡敎育會編並發行

黑津尻を中心とする郡誌で主として郡勢を記す。

## 岩手縣下閉伊郡志

洋装　一冊　菊判本

大正十一年　下閉伊郡敎育會編並發行

岩手縣東海岸にて宮古、山田の二港を有し水產に富む地方の郡誌である。（盛岡太田孝太郎君惠贈）

## 摺澤村誌

洋装　假綴　一冊　菊判本

大正四年　摺澤小學校編並發行

東磐井郡の中央部にある山間の一村誌である。（盛岡太田孝太郎君惠贈）

## 南部鐵鑛業秘錄　　洋裝　假綴　一冊　四六倍判本

溪　友一撰　　昭和三年

岩手縣久慈町を中心としてその附近にある砂鐵鑛と鐵鑛山を諸舊記により具体的に叙述したもので所謂南部鐵の德川時代における稼行狀態が知れる、本記は嘗て地學雜誌に連載されたのを冊子にしたのである。（東京植村癸巳男君惠贈）

## 岩手の金山　　洋裝　假綴　一冊　菊判本

明治三十八年　　岩手縣內務部第四課發行

東北黃金小史を叙し更に金山の革命として青化製煉法の發明を記したもの。

## 南部馬史　　洋裝　一冊　菊判本

佐藤陽次郎著

大正七年　八戸町　實業研究所發行

日本の產馬は古來南部駒か薩摩駒かといはれたものだ、その南部駒について我正史に載する馬歷を述べ次で南部藩の馬政、產馬牧等を說述した書である。



# 陸奥國の部

## 津輕藩史　　和裝活字本七卷二冊　中本

工藤主善撰

明治二十三、四年　弘前市　外崎覺出板

津輕藩の遺儒が漢文を以て藩祖爲信公（天文十九年—慶長十二年）より順承公（寬政十二年—慶應元年までの事歷を記す。

## 奥の手ぶり　　景本校訂本二冊　菊判本

菅江眞澄撰　　柳田國男校訂

昭和五年　東京三元社發行

信濃國の部に載せた「伊那の中路」以下の眞澄遊覽記影本の續刊である、本書は別項奥隅奇譚と同一地方の遊記で寒國の雪景色とその季節の民俗が窺はれる、南部叢書眞澄遊覽記の中にもこの書が收錄されてあるが單行本としてこゝに別に載錄す。

## 奥隅奇譚　洋裝一冊　四六判本

中道等撰

昭和四年　東京　鄉土研究社發行

陸奥國の青森灣を挾んで鉞形のやうに北に突出した兩半島の東部半島は下北郡である、著者はこの地方の民俗歷史を調査するために既に十九回の旅行を試みたといふ、この地方の要港に大湊あり、中心里邑に田名部町あり、而して靈地に古名宇曾利今の恐山がある、此郡內の奇俗傳說迷信を數々記述する中にその一半は南部恐山の由來や塔堂、溫泉地獄の記である、卷末に邑林源助著「原始漫筆」「風土年表」抄を附載す。（東京中道等君惠贈）

## 青森縣誌　洋裝一冊　菊判本

西田源藏撰

大正十五年　青森　成田書店發行

第一編青森縣廢藩前の歷史として諸家の興廢を叙し第二編名勝舊蹟第三編現況に及んでる中に前二編に重きを置いてある。



## 改正 陸奥誌略　一冊　中本

中島健三編

明治十四年　青森縣學務課藏板

小學校鄉土讀本である。（名古屋村野時哉君惠贈）

## 鷹岡城 一名弘前案內記　洋裝 假綴 一冊　菊判本

成田弘東散史編並發行　大正四年第六版

弘前の案內記であると共に市勢一班をも略記す。（青森古山勝太郎君惠贈）

## 津輕見聞記　和裝活字本一冊　四六判本

著者不明　寶曆八年記

昭和五年　青森縣立圖書館發行

上方の商人と思はるゝものが津輕領內青森、鰺ヶ澤、弘前等を巡て季侯、土地の有様、風俗、產物等の變りをるを見て何くれとなく書留めた見聞記である、この原本は函館圖書館に藏せらるゝを印刷に付し

た小冊子である。（東京岡崎鴻吉君惠贈）

**七戸町附近 先住民族遺跡調査報告**　洋裝假綴一冊　菊判本

七戸町附近の竪穴古墳の調査報告である。

**東津輕郡誌**　洋裝 假綴 一冊　菊判本

昭和四年　東津輕郡教育會編並發行

青森市を中心にその灣に沿ふて擴がる地方は往昔の外ヶ濱である、本書にはその年代記によりて歴史を語り郡内の名所舊蹟を主として說き終りに少しく現勢を叙す。



## 羽前國の部

**山形縣史**　洋裝 四冊　菊判本

大正九年　山形縣內務部編並發行

山形縣は羽前一國と羽後飽海一郡を管す、本書は伊佐早謙氏その編纂主任となり和銅五年出羽國建置より編年体を以て史書記錄より材料を採り之を列記して明治維新に及んで居る、その間に古文書、古器物人物の寫眞を挿み毎冊一千ページ內外の大著であるが、その浩瀚なる割合に本書によつて特に世に紹介された新資料は乏しいやうに思はれる、或は採訪に時を得なかつたのであらうか。

**米澤事跡考**　寫本 乾坤 二冊　中本

著者不明　元文五年記

出羽國置賜郡二百廿六箇村領地十五萬石の判物寫を卷首に置き、又陸奥出羽圖を載せ以下米澤城市より領內の郡村、山川、土產、社寺、墳墓、古城、赤湯溫泉、社寺並に七水七石、小國下長井の社寺、舊事、產物等を記す。

内務地誌目錄には「事蹟考」二種あり、一は明和年間僧日雄の撰するところ、一は丸山蔚明の著はすところである、現本は本文中に元文五年より何年云々の文字あるよりすれば日雄が著作に比べてやゝ以前のものらしく思はれる、然し國書解題に載する日雄撰の内容目次と大同小異なるを見ればそれとも思はれる、或は丸山蔚明の著といふが本書に相當するか、未だ他本を採訪せぬので比校に至らない。

## 鷹山公世紀　洋裝一冊　菊判本

池田成章撰　明治三十九年初板

大正十三年　東京　池田成彬再板發行

鷹山公上杉治憲は德川後期に米澤の明君といはれた人だ、日向秋月藩一萬石の小大名の子に生れて十五萬石の上杉家を繼いだ、上杉家は十五萬石の藩なれど昔の三十萬石の格式を以て自ら高く居り、國老等頑冥にて舊慣を墨守するため藩政窮乏して居た、治憲封に就くや藩政を釐革し勤儉躬行民風を改良し產業を起し藩の面目を一新した、本書はこの賢君の傳記事蹟を詳記してある。

池田成彬君先考の編述するところをその十三回忌記念とし再板に付し友人間に配布したのである。（東京池田成彬君惠贈）



## 三山雅集　三卷三冊　大本

野衲東水撰

寶永七年　羽黑文殊院呂笳發起

本書題簽には羽黑、月山、湯殿の三山名を冠し、又下端には緣起事跡詩歌連俳としてある、最上川を下つて清川から羽黑山に上り月山湯殿山に登山する順路の名所、行塲、拜所を記し、その間に景畵あり詩歌俳諧を加へて信仰と旅行と文藻を兼ねた地誌である。

## 三山略緣起　石版本一冊　中本

宮下正勝編

明治三十三年　羽黑山　三山神社々務所發行

本書板元を記さゞるも江戸か京都にて出板されたものゝ如く刷面鮮かに書畵とも簾し。

この書全冊石版印刷にて、羽黑、月山、湯殿の三山神社の沿革由來、神事、靈驗、參詣案內等を記す。

## 莊內物語　寫本五卷合一冊　中本

小寺信正撰　享保九年記

本書の序文に「或人の許より庄内物語といふものを求めて云々」とあり、別に「莊內物語」といふがあつたのか、それとも假托の說か未だ考へない、內務省地誌目錄、圖書解題みな本書を以て「莊內物語」としその卷數は本篇と附錄各一卷にしてあるが、家藏本は五卷本になつて居る。

第一卷には莊內卽ち田川飽海二郡の地勢並に古書にある大泉庄を說き、第二、三卷に武藤氏及一族の興亡を述べ、第四卷の前半に最上氏を叙し後半は社寺、古城、名所を擧げ、第五卷附錄に名山、古社寺、風俗習慣、農事を語り此卷が本書の厭卷をなして居る。

書末に「正德元年辛卯に此稿を企、享保九年甲辰に稿を脫す、小寺文貢信正手記」とある。

## 莊內歷史　稿本四冊　大本

田林禮堂撰　明治四十一年稿

第一卷に國號、神祠略記、郡莊名、國府略記、武家來歷、大寶寺城（鶴岡）龜崎城（酒田）尾浦城等を記し、第二卷以下には武藤、上杉、最上諸氏の治亂興亡と酒井氏就封のことを記す、この書未完稿のごとし。



## 最上郡史　和裝活字本一冊　菊判本

明治四十一年　最上郡役所編並發行

新庄藩の戸澤領沿革を叙したる後、其所の歲事記風俗志に及び更に各村の古城址、社寺其他古資料によりて地方變遷を述ぶ。

## 山寺名勝志　洋裝　假綴一冊　菊判本

伊澤榮次編

明治四十一年　山形縣山寺村保砬會發行

「奥の細道」に「靜けさや岩にしみいる蟬の聲」の句ある立石寺の名勝案內で寺記と風景志を兼ねた冊子である。

# 羽後國の部

## 秋田六郡村々細見行程記　寫本六卷六冊　大本

著者年代不記

秋田領六郡卽ち雄勝、平鹿、仙北、川邊、秋田、山本の各郡につき一郡一卷とし各村毎に石高、戸數、人口、馬匹數、小村、社寺を擧げ各村の來歷、傳說、產物、主なる古城、社寺等の由來、災害の著しきものを記するなど極めて眞面目なる郡村記である。

本書著作年代を明かにせざるも本文中に寬政年間の文字あり、又先年の地震に云々とあれば文化元年を遠く隔らざる頃領地巡檢藩士の作と見える、現本は安政六年の寫本である。

## 杵山峯の嵐　寫本五卷一冊　中本

岡見知愛撰　延享元年記

本書一名「六郡舊記」といふ、秋田叢書第一卷にも收錄せられ大日本史料に「杵山誌」の名にて引用せられたことが解題に記してある、その內容は秋田六郡の各村高を初め古城　その城主を主として沿革を



敍し、山川社寺の有名なるものについて由緒現狀を說き終りに隣藩の仙台、南部、弘前領の名所城市のことをも略記してある。

## 六郡郡邑記　一卷　秋田叢書第二卷收錄

岡見知愛撰　享保十五年記

この書一名を「享保郡邑記」ともいふ、秋田六郡の各村につきその小邑までの軒數を細記し、又各邑の位置、開發、道程等を記す。

## 六郡祭事記　一卷　秋田叢書第三卷收錄

著作年代不明

出羽六郡にある名神大社以下の諸社にて特に異風の祭式を傳承するものを採錄した書である、祭事記は歲時記で正月から順次の日取りによつて祭事を列記してある。

## 增補 雪の出羽路　雄勝郡 六卷 平鹿郡十四卷　秋田叢書第三、五卷收錄

奧羽への流寓者で此國の風俗研究者である著者の出羽六郡記中平鹿、雄勝二郡を記する書である、雄勝

纂は秋田圖書館本を初め縣内の諸本いづれも四冊本として知れて居たのを五卷に增補し且これに佐竹侯爵家に藏する著者自筆の「勝地臨毫」（實地寫生畫）の雄勝郡の部を添付して更に一卷を加へ六卷をなしたのである。

また叢書第五冊以下には平鹿郡十四卷を刊行しつゝある、內容はいづれも精しい郡邑記で所々に面白い風俗畫を點出してある。

## 雄鹿島詩歌集　稿本一冊　中本

姑堂東岳撰　明治三十年稿

享保十一年秋田藩の執政今宮義透が雄鹿半島に巡檢したときの詩歌と紀文を卷頭に載せ、次に德川時代の詩客歌人の風藻を列舉し、更に本文として著者が半島の湯本溫泉に滯在しつゝ觀光した紀文と其作詩歌と景畫とを收む。

## 絹篩　三卷　秋田叢書第二收錄

鈴木重孝撰　嘉永五年自序

雄鹿半島の地誌である、この半島五十八ケ村につき古記と自ら調査した新集とを對比し、而してその沿革、風俗、名所、古跡、物産等を記し頗る詳密なる記事をなして居る、所々地圖と挿畫あり。



## 秋田紀麗　一卷　秋田叢書第五收錄

人見藤寧撰　文化元年記

秋田城市のこと並に風俗に關して時序を追ふて年中行事を記錄した一卷。

## 代邑見聞錄　一卷　秋田叢書第五收錄

宇野親貞撰　寬保元年記

代邑とは能代のことである、著者は秋田藩の能代在勤で素より土地の事情に通じて居るから地方の地理行事、風俗等を記するはその所である、此地は古來地震の頻々とあつたので卷尾に元祿七年と寶永元年の地震記を附加してある。

## 雪のふる道　四卷　未刊隨筆百種第二十收錄

津村正恭撰　寬政二年記

秋田藩の用達を勤むる江戸の人が天明八年の冬、雪の道を秋田城下まで旅行し翌寬政元年を同地に過ご

し二年卯月に歸府するまでの記事である、雪國の景趣、風俗、物産などを擧げて土俗、地理、資料を提供する有益の著述である。

## 土崎鄕土史要　洋裝　一冊　四六判本

土崎知善撰

大正九年　土崎町　讀書會發行

## 象潟志　洋裝　假綴　一冊　菊判本

中村千代松著

明治三十八年　象潟町　植木石英發行

九十九島を有して出羽の名勝であつた象潟も文化の大地震で跡形もなき陸地となつて今は象潟町といふ邑になつて居る、本書は往古からの圖入でその沿革を叙し且附近の名勝や地方人物を紹介す。

## 羽後飛島圖誌　洋裝　假綴　一冊　菊判半截本

早川孝太郎著

大正十四年　東京　鄕土研究會發行

酒田港から二十海里の海上に孤立する一小島の地理、風俗志である、著者自身この島に八日間滯在して撮影した寫眞によつて島内のあらゆることを說明してある、その中にこの島の消防隊は既婚の婦人によりて組織され居ることが書いてある、といふのは全島漁民で男子多く出漁して留守なるため防火勤務は婦人のために殘されてあるのだ、そしてその消防機關は昔の龍吐水でこれを船に乘せて繰出すといふ。

(東京柳田國男君惠贈)



## 古四王神社考　一　卷　秋田叢書第三收錄

小野崎通亮撰　明治三年記

本書別名を「鰐田浦」といふ南秋田郡寺内村の國幣小社古四王神社の由來につき元祿年間佛徒より藩廳に四天王を祀るものといふ緣起書を呈出して居るに對し、著者はこれを否認して崇神天皇の時武甕槌神を祀り後大彥命や四道將軍を合祭したものが後に至り神佛混淆して仕舞つたと辯じて居る、しかし出羽にある古四王は越(コシ)で越人アイヌ神から發したものだといふ現代の硏究說もある。

## 秋田郡禪宗記　寫本　一冊　小形横本

天保十四年書寫

秋田藩領内各郡の禪宗寺院名を列記した控帳である。

## 羽越線案内　洋装　一冊　四六判2/3本

鐵道省編

大正十三年　東京　博文館發行

羽越線が越後村上から羽後秋田まで開通し兩羽の海岸線を完成したとき旅客のためその沿線の名勝を紹介したもの。

## 秋田縣勢振興論　洋装　一冊　菊判本

大正三年　秋田縣振興會編並發行

東北振興策の唱道にされた時の一書であるが、詰り縣勢の沿革と將來の發展策を記したもので中に景勝論もあつて一種の縣誌となつて居る。（湯澤富谷忠助君惠贈）



## 秋田縣の鑛物界　洋装　假綴　一冊　菊判本

大橋良一著

昭和三年　東京古今書院發行

獨り鑛物のみならず種々の地理的説明、天然記念物等について記す。（湯澤富谷忠助君惠贈）

# 北陸道諸國の部

## 萬葉越路迺栞　和裝活字本上下二冊　菊判本

高津瑞信撰

明治四十二年　高岡市　學海堂發賣

萬葉集の前詞と長短歌に現はれたる北陸道諸國の地名を昔と今とに比べて説明した書である、此歌集に現はれた歌は集の主たる撰者と傳へらるゝ大伴家持が越中國守として今の射水郡國府に六年間在勤して氷見の布勢水海の景色を愛好して屢々遊樂しときの歌が最も多い、從て本書二冊の大部分は越中に屬するもので他の諸國は極めて僅少である。

## 北國路之記　和裝活字本一冊　中本

仙果亭嘉栗撰　年代不記

京都の狂歌師といふが實は三井高業といふ富豪の旦那が江戸から高崎を經て上越の國境三國峠を越えて越後に入り北國路を西にとつて京にかへる日記である、卷首にこの稿本の原寸影寫を凸版にて載せてある、此人天明四年に家業を退いて文筆に隱れ大阪に移り好んで諸方に旅行を試み寛政十一年四月年五十三で沒して居るから著作年代も略ぼ知れる、本書は多分三井家の出板であらう。(東京朝吹常吉君惠贈)



## 金澤江戸道中分明圖　一帖　中形折本

撰者年代不明

金澤城下の繪を振出しに北國道の景書を收てある、高田に出て善光寺から中山道を經て江戸本郷の加賀屋敷までの山川景勝を道中に入れた彩色分間圖で、これに所々説明を加へてある、筆跡から見て德川時代中期のものゝやうである。

## 従金澤至京都道中名所記　一冊　小形橫本

嘉永七年(安政改元)　金澤　願精舍藏板

里程名所を記し、簡單なる沿革が載せてあるが、その叙事は月次の懷中案内記と撰を異にして居る、跋文に撰者がワザと失名してあることを述たのを見ると或る識者の作品と思はれる、附錄として京大阪播州めぐり等の道程を載す。

## 陸路迺記　上下二冊　中本

近藤芳樹撰
明治十三年　宮内省藏版

明治十一年北陸巡幸のとき文學御用掛として供奉員に加つた著者の扈從した旅日記である、この次の巡幸は東京から中山道を碓氷に至り長野に出で、それから關山、高田、柏崎、彌彦を過ぎて新潟まで進み、更に引返して北陸道を順路滋賀縣に入り京都に着輦さるゝまでの記である、所々に古代近世の史談などあり、又明治天皇が撫民の御大心など窺はれる。



# 若狹國の部

## 若狹國傳記　寫本一冊　大本

櫻井曲全子撰　年代不明

漢文にて記述し先づ管下三郡の境界、撿田數、和歌名所、土産、名物、國主略譜、沿革、社寺、山川、名所等を記す、德川初期に出來た多くの國誌と同一編躰である、舊藏者森田柿園は「寛文年中の著書にして此書本恐らく其原書か」と奥書して居る。

## 拾椎雜話　寫本二十八卷七冊　中本

木崎惕窓撰　寶曆七年稿

若州小濱の人木崎正敏の隨筆である、この書名は若狹の和歌名所後瀨山の歌詞なる峰の椎柴といふより得たのであらう、本書隨筆とはいへその十卷までは小濱の建置、沿革、町記を述べ十一卷町名、十二卷社寺にて、以下多くは若狹のこと又は若狹に立脚した隨感雜話である、郷土研究上相應に必要なる資料を含んで居る。

本書の原本は今も小濱の木崎家に存するが一部散佚して居るさうだ、現本は同じく小濱の舊家古川氏の舊藏で全冊完備して居る、但だ原本にあつてこの書にないのは小栗元凱の跋文である、よつて小濱の知人吉岡昌太郎君に依囑してこれを寫し添へをく。



# 越前國の部

## 越前國寺菴　稿本一冊　中本

其阿知善編　文政五年稿

この國の諸地誌より寺院の部を集成した痕あるも書中に多くの書入をなし、又見聞によりて記事を添へたところも少くない、中には寺觀を圖し、古文書を影寫し、緣起を記す、その上に寺菴を郡別に分ち又は宗派別にして索引を付してある、寺院誌にしては親切なる編纂方法をとつて居る、編者は今立郡岩本願成寺の住僧。

## 福井縣史　洋裝四冊　菊判本

大正九―十年　福井縣編並發行

編纂主任牧野信之助氏の主として編成したのである、第一冊は藩政時代以前、第二冊は藩政時代、第三冊は縣治時代、第四冊は附圖になつてゐる、福井縣は上代においては敦賀小濱等において海外との交涉があり、南北朝から戰國時代にかけて越前において幾多の決勝的戰鬪行はれ、藩政時代には親藩の重鎭が